三重県埋蔵文化財調査報告　34

松阪市山添町

山添遺跡発掘調査報告

1979

三重県教育委員会

序

公共事業、あるいは、民間の開発事業に伴う埋蔵文化財の保護措置の問題については、開発関係機関はもとより、一般住民の理解と協力を強く要請するものである。

ここに報告する山添遺跡は、松阪の県道豊原御麻生園線改良工事計画地内に所在するもので、鎌倉～室町時代、いわゆる中世を中心とした集落跡である。建物址、井戸址、溝址等の遺構をはじめ、多量の遺物検出は、中世の生活形態を考える上でも貴重な資料となり得よう。

調査にあたり、松阪市教育委員会、松阪教育事務所をはじめ、地元山添地区のかたがたの多大のご協力をいただいたことに対し、深く謝意を表するものであります。

昭和54年12月

三重県教育委員会

教育長　横田英司

例　　言

1．本報告書は、三重県教育委員会が、県土木部より執行委任を受けて実施した県道豊原御麻生園線改良工事に伴う山添遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は三重県教育委員会が主体となり、同文化課技師・新田洋が担当した。

3．出土遺物の整理、報告書作成は新田があたった。整理にあたっては森田尚宏の参加を得、報文中、Ⅳの５は森田に依る。

4．本遺跡の遺跡標示略記号は、９ＧＹＺで、本書の遺構標示については、下記の略記号によった。方位はすべて磁北を用いた。

ＳＢ；掘立柱建物址　　ＳＡ；塀状址

ＳＫ；土坑　　ＳＰ；水溜址

ＳＤ；溝址　　ＳＸ；その他

ＳＥ；井戸址

5. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　序　言 …… 1

Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2

Ⅲ　遺　構 …… 4

1　A地区の遺構 …… 4

2　B地区の遺構 …… 7

3　C地区の遺構 …… 8

Ⅳ　出土遺物 …… 12

1　古墳時代の土器 …… 12

2　奈良時代の土器 …… 12

3　平安時代の土器 …… 13

4　中世（鎌倉～室町時代）の土器 …… 13

5　石製品 …… 18

6　その他 …… 19

Ⅴ　結　語 …… 20

1　遺構・遺物について …… 20

2　歴史的考察 …… 23

図　版　目　次

ＰＬ１　山添遺跡地形図・山添遺跡位置図
ＰＬ２　山添遺跡・遺構平面図
ＰＬ３　井戸平面実測図・断面実測図
ＰＬ４　ＳＰ41・ＳＰ46実測図
ＰＬ５　ＳＸ47・ＳＰ48実測図
ＰＬ６　出土遺物実測図
ＰＬ７　出土遺物実測図
ＰＬ８　出土遺物実測図
ＰＬ９　出土遺物実測図
ＰＬ10　出土遺物実測図
ＰＬ11　出土遺物実測図
ＰＬ12　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＥ14
ＰＬ13　Ａ地区北半・Ａ地区全景
ＰＬ14　ＳＥ10断面・ＳＥ10底
ＰＬ15　ＳＥ14断面・ＳＥ14底
ＰＬ16　ＳＰ19内側集石状況・ＳＰ19
ＰＬ17　Ｂ地区南半・Ｂ地区中央部
ＰＬ18　Ｃ地区全景・Ｃ地区南半，ＳＢ52
ＰＬ19　ＳＫ44・ＳＰ46埋石状況・ＳＰ41埋石状況
ＰＬ20　ＳＸ47・ＳＰ48埋石状況・Ｃ地区中央部
ＰＬ21　ＳＰ41・ＳＰ46
ＰＬ22　ＳＰ41張出部・ＳＰ46張出部
ＰＬ23　ＳＸ47・ＳＰ48・ＳＰ48東側石組状況
ＰＬ24　出土遺物写真
ＰＬ25　出土遺物写真
ＰＬ26　出土遺物写真
ＰＬ27　出土遺物写真
ＰＬ28　出土遺物写真
ＰＬ29　出土遺物写真

表　目　次

第１表　掘立柱建物址の規模

挿　　図

第１図　山添遺跡発掘区位置図
第２図　古墳・奈良・平安時代の土器

Ⅰ 序　　言

多種多様な一般の開発事業行為と共に、いわゆる、公共事業に伴う埋蔵文化財の保護、処理の問題は年々増加の傾向にある。

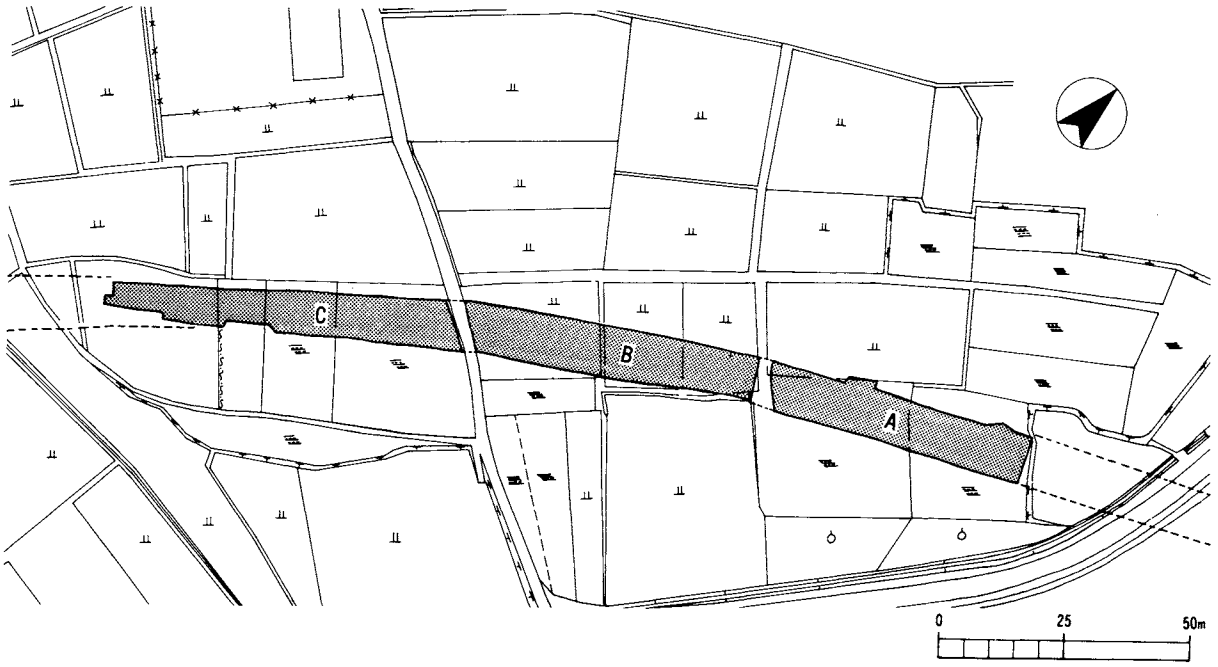
さて、県教育委員会では、年度当初、県土木部等、庁内の各開発関係課の事業計画を照会し、工事予定地域内の文化財の確認とその保護に努めている。

山添遺跡もその一つで、昭和51年度当初に照会し、回答のあった県道豊原御麻生園線改良工事計画予定地内に所在するもので、これまでの分布調査等により、計画図面上のセンター杭No.81からNo.102の間の畑地には、平安時代から中世に至る土師器片、山茶椀片等、かなりの遺物散布があることが確認されていた。

そこで、県教育委員会では、遺跡の範囲、実態を把握するため、昭和53年１月、県土木部より執行委任を受けて第１次調査を実施した。延長約350ｍの間に36ケ所の試掘坑（２×４ｍのグリッド）をあけた結果、９ケ所で溝、井戸、土坑等の遺構を、12ケ所で、土師器（鍋、皿）片、山茶椀片、常滑陶器片等の遺物出土を確認した。調査の報告概要は、『山添遺跡調査概要』（1978,１）として刊行済みである。

大局的には、道路図面上のセンター杭No.81からNo.90の間、延長約200ｍの範囲に遺構、遺物が集中していることが把握でき、遺跡の拡がり、範囲がある程度、判明できた。又、時代的には、土器よりみて、鎌倉～室町時代の遺跡であることも推定された。

そして、この第１次調査の結果に基づき、再び、県土木部と協議をすすめ、遺構、遺物の確認



第１図　山添遺跡発掘区位置図　（１：1500）

のあった延長約200ｍについては、第２次調査が実施される運びとなった。

調査方法は、測量基準点を道路図面上のセンター杭に求め、調査進行上、畦畔、あるいは、農道を境に全体を３区（北よりＡ地区，Ｂ地区，Ｃ地区）に分けて行ない、延長約200ｍ、面積約2000㎡についての全面発掘という形で施行した。調査は昭和53年12月４日に開始、翌54年３月初旬に終了した。

尚、調査にあたっては、県土木部道路建設課、松阪土木事務所、松阪教育事務所、松阪市教育委員会等の各関係機関、並びに、地元山添町の多くの方々の惜しみない御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

II　位置と歴史的環境

山添遺跡は、行政区画上、松阪市山添町字真土、里ノ垣外、辻の内にあたる。市制施行前は、飯南郡櫛田村大字山添と称し、のち、櫛田村より分れて山添村となり、今日の町名に至る。国道23号線が松阪の市街地に入る手前、櫛田川に掛かる櫛田橋の南西約１㎞の地点に位置し、現在は背後に小高い山をのぞむ他は、水田、畑作地帯として、のどかな田園風景を呈している。

遺跡のある山添一帯は、巨視的には、櫛田川低地[①]としての中にあり、紀勢本線を抜けると川幅を増して北流する櫛田川の形成した沖積平野の一角として捉えられるが、所々に低地内微高地も存在する。山添遺跡はその範囲内に水田低地をも含むが、およそは、こうした微高地状の畑地に求められる。標高13ｍ前後である。

さて、山添地域の歴史については、現在のところ、文献的にも、考古学的にもこれを物語る資料に乏しい。今回の調査において、遺物として最も時代の遡れるものとして、６～７世紀の後期古墳の時代に伴う須恵器(杯、瑠)片、土師器（椀）片が少量出土している。遺跡に最も近い西方、ちょうど山添の集落の背後に２基の古墳（山添１号墳、山添２号墳）[(1)]の存在も認められ、この点からも、山添地域の歴史、文化の黎緒が、遅くとも、古墳時代後期にあったことは現段階で言い得よう。

その他、周辺の古墳に目をやると、山添の集落の背後に縦長く続く丘陵上に一直線状に古墳が存在するのに気付く。前述の古墳をはじめ、隣町（安楽町）に属する西谷１号、２号、３号墳等[(2)]がその主なものであるが、地元の人の話によれば、戦後、幾つかの古墳が姿を消しているとのことである。又、集落の裏手南方、神山へ通じるやゝ高い山々にも中山田１号、２号墳[(3)]、やつで１号、２号、３号墳等[(4)]を含めて十数基の古墳が認められる。以上の古墳はすべて径10ｍ前後の後期（６～７世紀）に属する小円墳と思われる。

一方、古代における国郡制下の中にあって、この地域は伊勢国飯野郡に属していた。言うまでもなく、飯野郡は、寛平9（897年）年、神郡に編入されて以来、度会、多気郡と共に、神三郡と称され、古代伊勢神宮の直轄地として全戸が神戸であった。そして、飯野郡は、のちに隣接の飯高郡と合併して飯南郡となる。

ここで触れておかねばならないのが神山神社である。山添の人々にとって切っても切れないこの神社は遺跡の南方約800ｍにある。標高131ｍの丘陵頂部に位置し、『勢陽雑記』[②]には高宮とある。この神社の鎮座の経過については『三国地誌』に詳しい。又、『伊勢名勝志』[③]中には『皇太神宮儀式帳』の記事を引用して、神山神社と併列し、飯野郡高宮村に、天智朝時代、神宮屯倉が設置されたことが記されている。これはまた、のちに、神山に神宮領荘園としての神山御薗が設置されたことと無関係ではないであろう。

神山には、また、平安時代の創建と言われる一乗寺があり、その西側の山頂には、南北朝時代、田丸城の支城として北畠方の拠点となった神山城址[(5)]の存在が確認されている。この神山城には、延元2（1337）年、北畠親房の御教書をうけて、潮田幹景が兵を集めたてこもっている。こうした戦乱下の情勢は、無論、さほど神山より遠くない山添地域へも波及していたものと想像される。

他方、山添とは櫛田川をはさんで対岸する漕代地区の歴史についても定かではないが、各所に古墳時代から中世に至る遺物包含地が踏査、確認されている。[④]

以上が山添地域の歴史等を考えてゆく上での概観であり、今後に残された課題は山積みされているが、一つ一つの資料の積み重ねによって、漸次、地域史としての山添史が明らかになってゆくものと考えたい。

註

① 「この低地の地形は、各河川によって作られた氾濫平野の一般面とその上に発達する旧河道の凹部、自然堤防の微高地および河口付近の低湿な三角州からなる。」松阪市史編さん委員会『松阪市史　第一巻史料篇自然』（1977）

② 「高宮　松坂より巽　行程二里
山添村にあり。神山の北の麓に社有り。里人神山の明神といふ。延喜式神明帳に神山ノ神社とあり。遷幸要略に「垂仁天皇二十二年発丑十二月二十八日。自阿佐賀宮遷飯野高宮。奉斎四ケ年」と云々。又倭姫命世記「従飯野高宮迂幸伊蘇宮令座」云々。太太神宮宇治へ御鎮座ならざる前に先づ高宮に至り給ふと也。俗に此明神を一ノ鳥居と云ふ。宜成るかな」『勢陽雑記』（山中為綱．1655．三重県郷土資料刊行会刊第13集）

③ 「神宮屯倉　所在詳ナラズ延暦儀式帳ニ天智天皇三年多気郡四箇郷ノ地ヲ割キテ屯倉ヲ飯野高宮村ニ造ルト記ス三国地誌ニ云フ高宮村ハ今ノ山添村ノ旧名ナラント記シテ後考ヲ竢ツ」『伊勢名勝志』（宮内黙蔵・1889・三重県郷土資料刊行会刊第67集）

④ 松阪市史編さん委員会『松阪市史　第二巻　史料篇　考古』（1978）

Ⅲ　遺　　構

遺跡の全体の層序は、上より第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；茶褐色土、第Ⅲ層；黄褐色土（地山）となる。第Ⅱ層が、いわゆる遺物包含層であるが、地点によっては、第Ⅰ層の削平、攪乱によって層位が未分離なところもあり、又、第Ⅲ層への層移は、全対的に漸移的である。

さて、A、B、Cの3地区は層位において大差なく、無論、検出遺構についても関連性をもつものであるが、ここでは便宜上、調査方法における区分にしたがって各々を概述していきたい。

1　A地区の遺構

(1) 掘立柱建物址

SB1　桁行2間以上、梁行2間の東西棟の建物址と考えられ、棟方向はN62°Wである。柱間は、桁方向で7尺、梁方向で6尺である。側柱の柱穴は掘り方径60～80cmの不整円形で比較的大きい。妻中央の柱穴のみ径25cmと小さく、埋土も異なり、柱痕跡のみ残ったものかも知れない。その埋土は暗茶褐色粘質土であるが、他の柱穴埋土は、地山によく似た色調をもつが、やゝ黄色味の強い粘土混土である。柱穴内には、土師器（小皿、鍋）の細片を若干含む。

SB2　桁行2間以上、梁行2間の東西棟の建物址と考えられ、棟方向はN82°Wである。柱間は、桁方向で10尺、梁方向で6尺である。側柱の柱穴は掘り方径50～60cmの不整円形で、妻南端の柱穴はSB1と重複する。柱穴埋土はSB1と同様で、土師器（小皿、鍋）の細片を含む。SB1とSB2は遺物における時期大差は認め難いが、短い時期の中での建て替えと思われる。理論的には、SB2はSB1より古い可能性が強い。

SB3　桁行1間、梁行1間（南北2.1m×東西1.8m）の南北棟の小建物址と考えられる。棟方向はN30°Eである。建物の配置形態を考えれば、おそらくSB1と共存したものであろう。柱穴は掘り方径20～40cmとやゝ小さく、埋土中には土師器（鍋）の細片を含む。SB1に付属した、納屋あるいは、小屋的な建物と思われる。

(2) 土　　坑

SK4　発掘区の東壁面にかかって検出されたが、径2.2mの不整円形の土坑と思われる。確認できる最深は1.2mである。土坑壁は全体に3段に落ち込み、底に至る様相を呈するが、中心部は発掘区東壁東寄りと考えられ、さらに深い土坑である可能性がある。その機能としては、水

溜め穴、あるいは、簡易な素掘り井戸になるかも知れない。埋土は炭化物を多く含む灰黄色粘土で、山茶椀、土師器（小皿、鍋）の小片を含む。

ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ16　いずれも深さ30～40cmの底面が平坦な浅い土坑で、大きさの割には土師器細片を含む程度で、遺物は極少である。

(3) 溝　　址

ＳＤ５　幅80cm、深さ30cm前後の東西に走る溝で、断面は逆台形を呈する。埋土中には山茶椀、土師器（鍋、小皿）等の小片を少量含むが、新旧の遺物が混在している。

ＳＤ８　幅２ｍ、深さ30～40cmで、ＳＤ５とほゞ並行して走る東西溝である。西半部では２段に下がる。このＳＤ８は、自然地形を利用してつくられたものと考えられ、遺構面はこの溝を境に比高差30～40cmをもって北に高く、南に低い様相を呈する。溝埋土中には土師器（鍋、小皿、羽釜）を少量の他、白磁片を含む。

ＳＤ11　ＳＤ５、ＳＤ８と並行して走るが、中央部で約３ｍ途切れている。出入口的な空間を意味するのであろうか。深さ20cm前後の浅い溝で、埋土には、土師器（鍋、小皿、羽釜）、常滑鉢等の小片を含む。

ＳＤ17　幅60～90cm、深さ20～30cmの浅い溝で、西にゆくにつれ深く広がり、ＳＰ19へつづく。溝埋土にかなり多量の大小の川原石が認められたが、その在り方は無秩序である。又、石と石の間にかむような形で、多量の土師器（鍋、小皿）、常滑鉢、山茶椀の小片がみられた。

(4) 塀状遺構

ＳＡ９・ＳＡ12・ＳＡ13　いずれも、柱間６尺の柱穴が東西方向に面的でなく、一直線状に並び、又、前述の溝（ＳＤ11）等とほゞ並行してみられる点より居住空間を囲う柵址となるかもしれない。ＳＡ９の場合、ちょうどＳＤ11の途切れ部にあたり、ＳＤ11を入口的なものと考える時、一種の目穏塀的な意味をもつものかも知れない。ＳＡ９とＳＡ13の並びはほゞ一致している。ＳＡ12とＳＡ13はおそらくつくり替えによるものと思われるが、その前後関係は不明である。柱穴内には土師器（鍋、小皿）の小片を若干量含む程度である。

(5) 井　戸　址

ＳＥ10　上部で平面径約3.3ｍの円形の掘り方に構築された乱石積の石積み井戸である。井戸は、掘り方の底に裾えられた陣木上に石積みを行なったもので、その陣木には径約40cm、長さ約25cmの自然木輪を中空に刳り抜いたものを用い、周りにやゝ大きめの川原石と粘土を配して固定されている。そして、それより上へ、10～20cm大の川原石（中にはその割石もある）を約26段積み上げている。積石の断面プランは、底より８段目位まではほゞ垂直に、そして、９段目から14

段目付近では石自体もやゝ小さくなり、中膨みを呈する。又、それより最上段までは、再び、垂直に積まれている。最上段部における内側径は約60cmと狭い。この井戸の使用されていた頃の原形においては、井戸内に転石している積石に用いられたと考えられる川原石、割石が極少量であったことなどより、現存の天端の石をもって、およそ、この井戸の構築時の最上部と考えてよいだろう。この最上部より底まで約３ｍの深さがある。石積み構築の際の裏込めは、掘り方の土をそのまゝ用い、様々な土質のものが混在してまだら状を呈していたが、底になるにつれて、砂、礫の混合度が強くなるという状況である。土質は相対的に炭化物を多く含む粘質土であり、土師器（鍋・小皿）、山茶椀、山皿、屋瓦等の小片を比較的多く含むものである。やゝ意識的な感をもつが、陳木を固定する底石上に、約$\frac{2}{3}$残の墨書山茶椀（底部に＋印）が伏せた形で検出されたが、落下による偶然性のものかもしれない。尚、石組内にも埋土が充満しており、土師器（鍋、小皿)片を少量含むが、時期的には、掘り方埋土の遺物と大差はない。

井戸の覆屋構造については、井戸周辺に柱穴等は確認できず、不明であるが、直接、上部を木蓋等で覆ったものかもしれない。

ＳＥ14　上部で平面径約4.4ｍとかなり大きな不整円形の掘り方に構築され、ＳＥ10と同様な乱石積の石積み井戸である。これも、井戸は、掘り方の底に裾えられた陳木上に石積みを行なったもので、陣木は長さ80cm、幅6.5cm、厚み１cmの細い板材を正方形に組んだものを用い、ＳＥ10と同様、川原石と少量の粘土により固定されている。そして、それより上へ、10～20cm大の川原石、割石を約25段積み上げている。積石の断面プランは、ＳＥ10とは少し趣を異にし、ほゞ中央段位より膨らみ、そのまゝ底にいたる様相を呈する。又、井戸の原形においては、井戸内に積石に用いられたと思われる川原石、割石が多数、埋没していた点と、残存の最上部西半の石積みがかなり崩れ落ちていた点等より、さらにもう２～３段の石積みがあったと想定することが可能である。現存の最上段の天端より底までは深さ約2.9ｍである。石積み構築の際の裏込めは、ＳＥ10同様、掘り方の土をそのまゝ使用しており、その土質もよく似ている。遺物は、井戸内部埋土よりは土師器小片が少量検出されたのみで少ないが、掘り方内からは、土師器（鍋、小皿)、常滑や瀬戸の陶器、屋瓦等、比較的多く出土している。

尚、ＳＥ14においても、井戸の周辺を取り囲む柱穴等は確認できず、覆屋等の施設の有無は不明である。

ここで特記すべき点としては、ＳＥ14においては、石積みの石に焼けた痕跡をもつものもある。特に中央付近に目立ち、媒の付着した石もみられた。おそらくは、二次的な要因によるものと思われる。

(6) その他の遺構

ＳＸ18　30cm内外の大きさの似た川原石の集石である。石をはずすと、下には1.4ｍ×1.2ｍ

の楕円状の掘り方が検出された。深さは10cm前後と浅い。土師器（鍋、小皿）の小片を含む。

性格不明の集石遺構である。

ＳＰ19　北辺、東辺のみよく残存している石組みの遺構である。南北約2.4ｍ、東西約2.4ｍの方形に囲まれた石組み枠の残骸とも考えられる。30～40cm大の縦長方柱に近い川原石を３段に積み上げて囲ったものである。深さは、最上段の天端より約30cmである。石組内埋土中には多くの川原石と共に、土師器（鍋、小皿）、常滑鉢、山茶椀片等を多量に含んでいた。又埋土は底近くは砂が多くなり、底面と思われる土質は鉄分の沈着によるのか赤褐色を呈し、水の溜りの痕跡を示すものかもしれない。

2　Ｂ地区の遺構

(1) 掘立柱建物址

ＳＢ25　桁行２間（あるいはそれ以上）、梁行２間の東西棟の建物と考えられ、棟方向はＮ72°Ｗである。柱間は、桁方行で８尺、梁方向は妻中央の柱穴を検出できなかったが７尺と思われる。柱掘り方は径30～80cmと大きさが不揃いで、柱穴内には、土師器（鍋、小皿）の小片を少量含む。

(2) 土　　坑

ＳＫ20・ＳＫ21・ＳＫ22　いずれも1.5～２ｍ前後の土坑であるが、深さ20～30cmと比較的浅く、又、遺物も極少量の土師片を含むのみである。

ＳＫ24　南部で２段に下がる約1.1ｍ×0.7ｍの土坑であるが、掘り方検出の段階では中心部近くに４個の川原石が裾えられた形になっていたが、意識的かどうか不明である。深さは25cmで、遺物を全く含まない。ＳＫ24はＳＤ23を切っている。

ＳＫ27　溝の一部かとも考えられるが、南北に長い、幅1.2ｍ、深さ40cm前後の土坑である。埋土内には、土師器（鍋）、常滑陶器、天目茶椀等の小片と共に、古墳時代の須恵器が混入している。

ＳＫ29・ＳＫ30　いずれも径約3.5ｍの円形土坑であるが、ＳＫ29では深さ10cmと浅く、ＳＫ30では深さ60cmと深く、埋土中に20～30cm大の川原石を数個含む。埋土には、ＳＫ29では土師器（鍋）、常滑陶器片を極少量、ＳＫ30では、その他、山茶椀、山皿を含み、古墳時代の須恵器を混在する。

(3) 溝　　址

ＳＤ23　幅１ｍ、深さ30cm、ほゞ東西に走る溝で、東部で幅約３倍に拡がる。西半部では、

溝の北肩から北へ幅40cmの低い堤状を形成し、それを境に北へ一段低くなる様相を呈する。溝全体に川原石の散乱、埋没が多いが、特に拡張部における集石はおびただしく、中でも南端のやゝ大きめの石は、東西への意識的な配置をおもわせた。しかし、精査の結果、遺構としての規則性を捉えることはできず、多量の石の集石については性格不明である。又、埋土内には石と共に、多量の土師器（鍋、小皿、羽釜）、山茶椀、常滑陶器、天目茶椀片を含んでいた。

ＳＤ26・ＳＤ28・ＳＤ31　ＳＤ26は、幅1.6ｍ内外、長さ約7.5ｍ、深さ25～30cm、ＳＤ28は幅約２ｍ、長さ10ｍ、深さ10～15cmの溝状を呈する。大きさの割には遺物は少ない。埋土は砂を多く含む土で、明らかに他の遺構の埋土と異なる。ＳＤ31は幅2.8ｍで深さ50cmとやゝ深く、全体に砂礫の埋土であり、数個の川原石を含む。底近くで、土師器（鍋、小皿）、瀬戸陶器片を少量検出した。ＳＤ26、ＳＤ28は近世以降の時期の新しいものかも知れない。

ＳＤ32　幅30cmの細長い溝から西へ拡張する。深さは、約10cm、拡張部で20～25cmと深くなる。拡張部では小さめの川原石の散乱、埋没が多い。土師器（鍋）片多量の他、土師小皿、常滑片、山茶椀片等が出土。

3　Ｃ地区の遺構

(1)　掘立柱建物址

ＳＢ36　桁行２間以上、梁行２間、東西棟の建物址と考えられ、棟方向はＮ70°Ｗである。柱間は、桁方向で６尺、梁方向で７尺、北面に廂がつくものと思われる。廂の柱間は５尺である。柱掘り方は径35～50cmの円形で、廂部分の柱穴は、身舎部分に比べひとまわり小さい。柱穴内埋土には土師器（鍋、小皿）の細片を少量含む。

ＳＢ37　桁行２間以上、梁行２間、東西棟の建物址と考えられ、棟方向はＮ55°Ｗである。柱間は、桁方向で７尺、梁方向で６尺、規模的にはＳＢ36と相似している。ＳＢ36とＳＢ37は建て替えによる前後差が考えられる。柱掘り方は径40cm前後の円形を呈する。柱穴内埋土には遺物をほとんど含まない。

ＳＢ38　桁行２間以上、梁行２間、東西棟の建物址と考えられ、棟方向はＮ85°Ｗである。総柱であるが、内側の柱穴は小さく、床束かも知れない。柱穴内埋土には土師器（鍋）小片を少量含む。柱穴の切り合いより、ＳＢ38はＳＢ37より新しいと考えられる。

ＳＢ45　桁行２間以上、梁行２間、東西棟の建物址と考えられ、棟方向は75°Ｗである。柱間は、桁、梁方向ともほゞ７尺であるが多少広い狭いがある。柱掘り方は、径40～60cmで円形、あるいは、楕円形を呈する。柱穴埋土内には、土師器（鍋、小皿）の小片他、鉄釉小皿、常滑鉢片を含む。

ＳＢ52　桁行２間以上、梁行２間の建物址と考えられ、棟方向はＮ74°Ｗである。柱間は桁方向で５尺、梁方向では、７尺、５尺の不等間である。柱掘り方は径20～30cmと比較的小さい。柱穴内埋土には、土師器（鍋、小皿）小片を若干含む程度である。

(2) 土　　坑

ＳＫ39　ＳＤ35の東肩を切ってつくられた約3.3ｍ×２ｍの楕円状の穴で、北東隅で一段深くなって底に達する。最深は約1.4ｍである。 埋土には土師器（鍋、小皿）、常滑陶器、山茶椀片の他、古墳時代の須恵器片を混在する。

ＳＫ44　半円状を呈する深さ約50cmの窪み穴である。埋土は土師器（鍋）片等を含み、又、多量の大小の川原石を放棄した痕跡がみられる。埋土上面の多量の川原石も規則性をもたない。

ＳＫ53・ＳＫ54・ＳＫ55　いずれも30cm前後の底の平坦な穴である。ＳＫ53、ＳＫ55はほとんど遺物を含まない。ＳＫ54埋土には土師器（鍋）、常滑片の他、古墳時代の須恵器片を混在する。

(3) 溝　　址

ＳＤ33　幅80cm～１ｍ、深さ50cm前後で、北に向って拡がり、発掘区の北西隅では２段におち、深さ１ｍとなる。遺物は大きさの割に少量で、土師器（鍋）小片の他、山茶椀片を少量含む程度である。

ＳＤ34　南北より東西方向に折れて走る幅80cm～1.2ｍ、深さ15～20cmの浅い溝であるが、ＳＤ33、ＳＤ35に切られ、最も古いと考えられる溝である。遺物をほとんど含まない。

ＳＤ35　各所で溝幅を変え、拡張部を２箇所もつ、おそらく前述の建物群の全体（居住空間）を取り囲む溝と考えられる。今回検出の遺構では、このＳＤ35を基として、中央部分の拡張部で、これに関連すると思われる石組、あるいは、集石遺構（ＳＰ41，ＳＰ46，ＳＸ47，ＳＰ48等）を検出している。深さは平均して約30～40cmである。又、北よりＳＫ39に切られる付近までには、溝埋土上面、内部に川原石の転石が多量にみられ、本来は、石組溝であった可能性も考えられる。埋土中には、土師器（鍋、小皿）、常滑甕・鉢、灰釉小皿、山茶椀をはじめ、五輪塔石片、石臼片等、遺物は多量である。

ＳＤ40　ＳＤ35の拡張部より西へのびる溝と思われるが、北肩の川原石は東西に整然と配置され、本来は石組溝であった可能性を示唆している。埋土には土師器小片と共に、川原石の埋没多多い。

ＳＤ42　ＳＤ40とほゞ対称位置にあり、東にのびるものと思われる。この溝では川原石の埋没はみられない。

ＳＤ43・ＳＤ49　いずれも二又に分れる東西に走る溝で、ＳＰ41、ＳＰ46、ＳＰ48との連関を意味する他、ＳＢ45を中心とした居住空間を区画している溝とも考えられる。幅約60cm、深さ

20～25cmの浅い溝である。ＳＤ43の内、北の溝内には川原石を多く含み、土師器（小皿、鍋）、常滑鉢等の土器をかんでいた。

ＳＤ50　東西に走る幅60cm、深さ15cm前後の浅い溝で、ＳＤ51、ＳＤ35に切られている。遺物はほとんど含まない。

ＳＤ51　十字形に走る溝で、幅60cm前後、東にしだいに深くなり約50cmである。埋土中には土師器（鍋、小皿）、常滑鉢、瀬戸陶器片等を少量含む。南北方向は深さ約60cmとかなり深く又、その肩は急勾配で底にいたる。

ＳＤ56　幅約２ｍ、深さ50～60cmで、東西方向より、西端で北へ曲折するものと思われる。ＳＤ35が、Ｃ地区の居住空間を取り囲む内溝とすれば、ＳＤ56はその外方をさらに取り囲んでいた外溝である可能性がある。埋土には、土師器（鍋、小皿）、山茶椀片、常滑（鉢）片を比較的多量に含む。中央部は小さな中の島となり、その東では２段に下がる溝である。

(4) その他の遺構

ＳＰ41　途中でコの字形の張出部をつくり、延長約4.5ｍ残存する、石組み遺構である。縦長で20～30cm大の川原石を地山より３～４段乱石積みしたもので、石の大きさには様々なものがあり最下部には比較的大きい安定性のある川原石を配する工夫がみられる。張出部は平面が小石室風を呈し、これより東西に石組石列がのび、ＳＤ40・ＳＤ42につながる様相をもつ。ＳＤ40では石列の延長と思われるものが北肩にのこるが、ＳＤ42では石は全く検出できない。又、拡張部より東の石列は重列を呈する。石の配列より南側に頭（ツラ）を合わせたものと判断できる。石組内底より遺構面までの高さは約80cmである。この石組遺構の構築は、ＳＤ35をはじめ一連の構をつくる際にその張出部を地山まで下げて、そこから石積みを施したもので、ＳＤ35の不定形な拡張部そのものが、ＳＰ41の掘り方ということができる。裏込めとしては、掘り方の埋土をそのまま使用し固めている。また、このＳＰ41埋土には多量の川原石が散乱、本来の姿をどの程度残存している状況かは推定し難いが、南肩にそった拡張部にわずかに残る川原石の配置状況から考えて、こうした石積列が囲むように原形では存在したことも推定できる。底付近の埋土土質は砂が多く、又、鉄分を多く含む赤褐色を呈する点等より、水の溜りの痕跡とも考えられるが、現状では、一応、水溜的な施設址と考え、今後の類例の検出に待ちたい。

ＳＰ46　ＳＰ41と同様、一辺に拡張部を有する、石組遺構である。張出部付近の川原石は、特に大型の方柱状の石で、その組みも丁寧である。あたかも古墳の小石室をおもわせる程である。このＳＰ46埋土にも多量の川原石の散乱がみられ、原形をどの程度残しているものかは判断し難い。形状は定かでないが、おそらく石組はコの字形に囲むような形であったと思われ、又、埋土下層近くの土質は砂でやはり鉄分を多く含み、水溜りの痕跡を示唆している。埋土中には大小の川原石と共に土師器（鍋、小皿）、常滑（甕、鉢）等を多量に含み、一部の壊された石組の石と共

にまとめて廃棄されたものと思われる。

ＳＸ47　幅約60cm、長さ1.6ｍの平面が長方形を呈する集石である。外郭には、10～15cm大の石を囲み、その中にそれより小さい石、礫を全面に敷いた遺構である。この石は、ＳＰ46・ＳＰ48を構築した後の裏込め上面に配石したもので、集石は層をなさない。故に、ＳＸ47はその周囲、及び内側に掘り方をもたない。当初、中世墓の一部とも考えたが、土坑、焼土、あるいは内部施設等を検出できず、まさに、性格不明の集石遺構と言わざるを得ない。

ＳＰ48　南辺部の残りは悪いが、南北約 1.7ｍ、 東西3.4ｍ以上の平面が長方形を呈する石組み施設と思われる。石組は、20～40cm大の縦長の川原石を約４段乱石積みした方形の囲みである。埋土中には石組みと同大の川原石を多量に含み、おそらく南辺の石積みの転落と考えられる。埋土は上より粗砂が充満し、やはり、ＳＰ41、ＳＰ46同様に水溜りの痕を示唆している。遺物は、土師器（鍋、小皿）等を少量含む程度で、ＳＰ41、ＳＰ46埋土に比べ非常に少ない。

以上が、Ａ、Ｂ、Ｃ３地区の遺構の概述であるが、勿論、掘立柱建物にしても時期差がみられ、全体の遺構配置の小時期差を考えられるが、単一包含層に新旧の遺物を混在し、層位的に遺構年代を捉えられないという遺跡の性格上、それを細分することは困難である。

ここでは、一応、相対的な遺物の時期幅、量差より考慮して、遺構年代をおおまかに、鎌倉時代末頃～南北朝・室町時代前半期までの時期（14～15世紀）の中におさえておきたい。しかし、少量ながら、室町時代後半～末頃まで下る時期の遺物もみられ、おそらく、完全なる廃絶期としてはこの時代にまで下げられる可能性をもっている。

第１表　掘立柱建物址の規模　　（　）は以上を示す

名称(ＳＢ)	規模(間)	桁行(ｍ)	梁行(ｍ)	棟方向	柱間(ｍ) 桁行	柱間(ｍ) 梁行	備考
1	—(2) × 2	—(4.2)	3.6	N60°W	2.1	1.8	
2	—(2) × 2	—(6.0)	3.6	N82°W	3.0	1.8	
3	1 × 1	2.1	1.8	N30°W	2.1	1.8	
25	—(2) × 2	—(4.8)	4.2	N72°W	2.4	2.1	
36	—(2) × 2	—(3.6)	3.6	N70°W	1.8	2.1	梁行2.1+1.5
37	—(2) × 2	—(4.2)	3.6	N55°W	2.1	1.8	
38	—(2) × 2	—(4.2)	4.2	N85°W	2.1	2.1	総柱（床束か）
45	—(2) × 2	—(4.2)	4.2	N75°W	2.1	2.1	
52	—(2) × 2	—(3.0)	3.6	N74°W	1.5	2.1	梁行2.1+1.5

Ⅳ　出土遺物

遺物は、大別すれば、土器類、陶器類、石製品、土製品、屋瓦等に分けられる。土器類の出土量が最も多く、中でも、日常雑器としての土師器（鍋、小皿類）が多いことは、消耗率を考えても当然と言えよう。

〖出土遺物一覧〗

須恵器（杯、瓶）

土師器（杯、椀、小皿、甕、鍋、羽釜、落し蓋）・緑釉陶器（椀片等３点）

山茶椀、山皿

瓦器（椀）

瓦質土器（火舎）

陶器（常滑甕・鉢・瀬戸灰釉、鉄釉天目茶椀・平茶椀・茶壺）

磁器（青磁椀・皿、白磁椀、染付椀、絵付椀）

屋瓦（丸瓦、平瓦）

石製品（石硯・五輪塔、石臼）

土製品（土錘）

出土遺物は、時代的には、古墳時代後期を上限としてみられ、以下奈良、平安時代のものを含むが量的には非常に少ない。中世（鎌倉～室町時代）に属するものが最も量的に多く、中でも鎌倉時代末葉～南北朝、室町時代前半頃までのものが大半を占めている。

さて、以下、時代別、形態別に、図示し得た遺物について、個々に概述してゆく。

1　古墳時代の土器

この時期のものとして須恵器（杯・瓶）、土師器（甕・椀）があるが、いずれも小片である。第２図・１の椀は、口径11cmで、口縁端部が水平に外にひらく丸底風の椀である。口縁部はヨコナデされ、内面は右回りにハケ調整されている。外面は不調整で、やゝ凹凸がめだつ。古墳時代でも後期に入るものと思われる。

2　奈良時代の土器（第２図・２、３）

３は皿で口縁部がやゝ内側に肥厚する。内面、口縁部をヨコナデ調整、底部はヘラ削りされてている。２は、杯で口縁部は端部につれて器壁がうすくなり、ほゞ真直ぐに立ち上る。口縁部、内面はヨコナデ、ナデ調整されているが、外面は剝落して不明である。奈良時代後半のものであ

ろう。

3　平安時代の土器（第２図・４）

薄手の杯で、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデられ、外面は不調整でオサエによる凹凸がめだつ。胎土も細砂粒を少量含み、やゝ粗い。平安時代後半に属するものである。

この時代に入るものとして、緑釉陶器の小片が３点出土している。濃緑色の釉で胎土の硬質なものと、淡緑色を呈し、胎土の軟質なものの２種に分けられる。椀片とおもわれるが、内１点は残欠の形状より風字硯になる可能性のあるものがあるが、細片のため不詳である。

4　中世（鎌倉～室町時代）の土器

(1)　土師器

小皿Ａ（１～４）　口径８～10cmの小皿で、４は中でも器高が低い。いずれもロクロ成形によってつくられ、底部に明瞭な糸切り痕をとどめる。内面に媒の付着が認められるものもあり、灯明皿としての用途も考えられる。

小皿Ｂ（５～８，25・26）　径８～10cmのものと、11～12cmとやゝ口径の大きいものとに分けられる。いずれも器壁は厚目で、手づくねによる雑なつくりの皿である。内面はすべてナデ調整されており、８を除いて、口縁部外面はヨコナデされているが、その範囲はまちまちである。胎土は細石粒をやゝ多く含み、相対的に粗い。25、26は他に比べ径も大きく深く、別形態と考えた方がよいかも知れない。

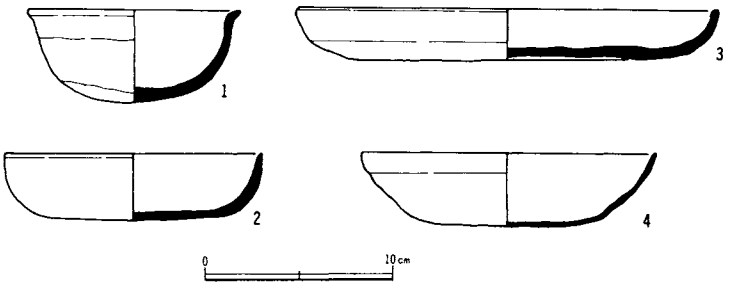
小皿Ｃ（９・10）　口径10cm内外の薄手の皿である。内面はいずれもナデ調整により平滑にされているが、９では口縁部外面、10では口縁部端部のみヨコナデされるという差がある。形態技法的には、９は小皿Ｄに近く、10は小皿Ｂ（25・26）に近い。

小皿Ｄ（11～24・27・28）　口径６～９cm内外で、やゝ大きさにバラツキのある薄手の皿である。内面はすべてナデ調整されているが、外面は、ア．不調整なもの（14・15・18～20）イ．口縁端部のみヨコナデされるもの（16・17）ウ．口縁部全体をヨコナデされるもの（11～13・21～24・28）の３タイプに分けられる。ア、イ、ウは、型式的には新しい順となるものかもしれない。

小皿Ｅ（37～40）　口径７～９cmの薄手の皿で、口縁部は内彎して立ち上り、端部は尖り気味になる。内面はすべてナデられ平滑に丁寧に仕上げられているが、外面は不調整で、オサエによる指圧痕も所々に認められる。色調は他の小皿に比べ、白っぽく、胎土は精良である。

皿（29～34）　口径11～18cmと様々であるが、底部から口縁部に至るまでに段を有する形態は均一である。口縁端が尖り気味に立つのもすべてに共通している。内面はすべてナデ調整されているが、外面は口縁部をヨコナデ調整しているが、以下、底部までは不調整で、オサエによる

指圧痕がみられる。口縁部外面に黒媒の付着しているものが2～3みられ、41のような、落し蓋として（あるいは、その代用）の用途も考えられる。



第2図　古墳・奈良・平安時代の土器

さて、これら各形態の小皿（皿）等の時期であるが、ロクロ成形の厚手の小皿Aは鎌倉時代初頭～前半に位置付けられ、小皿B・小皿Cは同時期あるいは、やゝ下る頃、小皿Eは鎌倉時代後半と思われ、小皿D、小皿Eはさらに下り、室町時代に入るものと考えられる。一般的には、厚手→薄手化、技法の簡略化の傾向をたどることができる。

杯（35・36）　口径10cm内外で、底の平らな深皿風の杯である。内面はナデられ、外面は口縁部をヨコナデ、以下は不調整でやゝ凹凸がのこる。口縁端部はやゝ面をつくり、36では、そこに浅い沈線が一条走る。これらの杯は、形態的に、中世よりさらに遡る可能性もある。

落し蓋（41）　内面ほゞ中央部に薄く扁平な半円形の粘土を貼り付けてつまみとしたもので、平らな底部より、口縁部は鋭く外反して水平口縁状をなす。口縁部外面には媒が多量に付着している。

小型杯（42）　薄手の外方へふんばった高台をもつ杯で、口縁部は外反する体部より真直ぐに立つ。口縁部内外面はヨコナデされ、内面はナデられているが体部は不調整である。色調は黄色味をおびた白褐色を呈するが、胎土は小皿Eと似ており、比較的、精良といえる。

羽釜（56～60）　口縁部、鍔の形態等より羽釜A（56）、羽釜B（57）、羽釜C（58）、羽釜（D）の4つに分類される。57、58は他に比べ胎土に砂粒を多く含み粗く、又、器壁も厚い。57では外面全体に粗いハケメが施されており、58では鍔以下にそれが認められる。

59、60は、器壁は薄手で、胎土も比較的、緻密である。又、口縁部外面にはヨコナデによる段状を形づくり、畿内で15C後半～16Cに出現する瓦質土釜の形態にも類似し、新しいタイプのものと思われる。形態、技法等より、B・C→A→Dという編年が一応考えられる。

鍋A（61）　体部より強く外反する口縁部は、端部で内側へ折り曲げられて面をつくる器壁は厚く、胎土は細砂粒を多く含み粗い。口縁部と体部外面との境は明瞭で、稜をつくる。口縁部内外面はヨコナデされているが、体部外面は不調整か、凹凸が少々みられる。

小形鍋（62～67）　径20cm前後、高さ6cm前後、鍋としては小形で浅いタイプのものである。口縁部は折り返し口縁を呈し、端部上面は面をつくる。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、外面は体部以下、ヘラケズリされている。器壁は薄く、胎土は比較的緻密である。

鍋B（68～72）　くの字形に外反する口頸部より、口縁部は断面三角形を呈し、端部は上方につまみあげられる。端部外面にはヨコナデによる擬凹線が一条走る。比較的、浅いタ

イプのものであろう。技法的には共通するところが多く、外面は体部上半ハケメ、下半はヘラケズリ、内面は下半部をヘラケズリしている。色調は褐色～茶褐色を呈し、胎土は比較的、緻密である。

鍋C（75～76）　形態的には上述の小型鍋に似ているが、ひとまわり大きく、深いものである。口縁部内外面はヨコナデされ、体部上半には帯状にハケメがのこる。内面は口縁部以下、ヘラケズリされている。

鍋D（73・79～82・83～87）　体部より外反してのびる口縁部は比較的長く、端部は一般に断面三角形を呈するが、その形態は様々である。体部は全体に丸底風の深鉢的な形態を有するタイプと思われる。口縁部内外面はすべてヨコナデされ、体部上半には粗めのハケメがのこり、下半はヘラケズリされているようである。内面は、上半部、ナデられているもの（83・84・87）、ナデに近い細いハケメのあるもの（79・80・81・86）等があるが、下半部～底はヘラケズリされている。

鍋E（77・88～90）　口縁部が比較的短く、端部は上方へ立ち、断面三角形を呈する。口縁端部に89・90のように一条の沈線の走るものもある。底部は一般にやゝ平底風になるタイプと思われる。口縁内外面はすべてヨコナデされているが、外面では、口縁部以下ヘラケズリされるもの（88）と、胴部上半にハケメ、下半はケズられているタイプ（89・90）に分けられる。外面には媒が多く付着している。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含むが、比較的緻密である。

茶釜形鍋（96～105）　口縁部の形態等より、A（96・99・97・98）、B（103）、C（100・105）、D（104）、E（101・102）に分けられる。

Aは短い頸部より口縁部は外反して丸くおさまり、やゝ受口的な端部を形づくる。96には対称位置に扁平で薄い粘土を貼り付けた耳をもつが、他も破片であるため不明であるが、耳をもつものが一般的なものかも知れない。97・98は、96・97の小型化したものであろう。

口縁部内外面はヨコナデされ、体部にはすべて明瞭にハケメがのこる。

D（104）は、中空の把手がつくもので、口縁部のつくりはAに似ている。やゝ下膨れの胴部をもつ。外面は粗いハケメが施され、底近い下半部にはヘラケズリの跡がのこる。色調は明褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。

Eは、球的な胴部より真直くに立ち上る口縁部をもち、端部は尖り気味となる。101は対称位置に耳が貼り付けられている。口縁部内外面はヨコナデ、外面上半には全面ハケメが施されているが、下半部はヘラ削りされている。Cも同形態であるが、口縁部のつくりを異にしている。これらの茶釜形鍋は、口縁部の形態、媒の付着状態より推して、おそらく落し蓋のような形態の蓋がつくものと思われるが、98・99・100等はその形態より木蓋がつくものかもしれない。胎土は砂粒等を少量含むが、一般に、緻密なものが多い。99・100・105をはじめ外面には媒の多く付着しているものが多く、やはり煮沸用の器であろう。

(2) 山茶椀・山皿

山茶椀（43～48・53）　48を除くと、いずれも内底面と体部との境が明瞭で、直線的な体部、口縁部をもつ山茶椀である。高台はすべて低く小さめである。ロクロ水挽き成形によるもので底部外面に糸切り痕をのこす。44・48等は、高台にモミ殻圧痕がみられる。色調はくすんだ白灰色を呈し、胎土は細砂粒を多く含み、やゝ粗い。53の底部には「＋」という墨書がみられるが、体部も同じ墨書かもしれない。48の底部にはひらがな風の三文字が墨書されているが判読できない。

山皿（50～52）　いずれも高台の退化・消滅した山皿である。ロクロ水挽きによる成形で底部に明瞭な糸切り痕をのこす。色調は白灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。ここに掲げた山茶椀、山皿の時期であるが、山茶椀はすべてその形態より鎌倉時代後半～末頃か、（48はやゝ古出か）と思われ、これらの山茶椀に52のような山皿が伴うであろう。50・51の山皿はもう少し時期の遡るものと考えられる。

(3) 陶磁器

天目茶椀（106～114）　胴部の外反度、口縁部の形態より、何種類かに分けられそうであるが、各々、細目は異なる。106のように口縁部が薄く直立的に立つもの、111、114のように口縁部の立ち上りから端部で外反して丸くおさめるものを両極として、他は、その中間、あるいは、退化形態と思われる。施釉はすべてつけ掛けによるもので、釉だまりがみられる。鉄釉と思われ、色調的には光沢をもつ茶黒色を基調としたもの（106・107・108・113・114）と、光沢のないくすんだ茶～茶灰色を基調としたもの（109・111）に分けられる。つけ掛け釉されていない部分も薄茶色を呈するものが多く、おそらく、全体に薄い鉄釉をかけて、再び、施釉して焼く二度焼きによるものと考えられる。高台は残存例が少ないが、ヘラケズリによる削り出し高台である。瀬戸窯、あるいは、美濃窯のものであろう。

平茶椀（115・116）　施釉範囲も天目茶椀に比べ狭く、又、口径に比べ底径が小さく、胴部の外反度の極めて強い椀である。天目茶椀より分化したものと言われ、116の口縁部はその伝統をひいている。115になると直線的な口縁部で、端部は面をつくる。施釉はいずれもつけ掛けにより、淡灰緑色を呈する灰釉である。露胎部には釉はかからない。瀬戸産であろう。

鉄釉小皿（118～120・122）　すべて黒茶色の光沢ある釉がほゞ全面にかかる小皿である。他に比べやゝ薄手で、口縁部が水平気味にのびるもの（118）と、短く、直線的なもの（122）とその中間的なもの（119・120）に分けられる。高台はいずれも削り出しによる低いものである。底部内外面に重ね焼きの際に使われた窯道具の跡がのこるものが多く、その部分のみ釉が剥落している。

灰釉小皿（121・123）　形態的には鉄釉小皿によく似ているが、口径、器高ともにやゝ大き

目である。口縁端部が水平に折れ曲がる121とそのまゝ丸くおさまる123とがある。いずれも淡灰緑色の釉がほゞ全面に厚くかかり、内底部は細かい陥入がある。高台は削り出し高台による低いものである。底部外面には重ね焼きの際に使われた焼台の跡がのこり、その部分のみ釉が剥落している。胎土はやゝ黄味おびた淡褐色を呈し、胎土的にも鉄釉小皿に似ており、おそらく、瀬戸産と考えられる。

青磁椀（124～126・128～131）　外面に蓮弁浮彫り文様がみられるものが多いが、124・125のようなふくらみのある蓮弁のものと、退化的な短冊状の蓮弁のもの（131）に分けられる。126は外面に蓮弁、又、内面見込み部にも簡略化された花文がみられる。130では外面の蓮弁はみられず、見込み部に双魚文が施されている。一般に釉は厚く、青緑色を呈するものが多いが、130は青白っぽい色調を呈している。

青磁皿（127）　比較的高い高台を有する青磁皿で、口縁端部は輪花状になっている。見込み部には、印花文が施されている。釉は外底部を除く全面に施され、暗緑色を呈する。胎土は堅緻。

白磁椀（133）　口縁部は下方に垂れ下り、玉縁部をつくる白磁椀の典型例の一つである。釉はやゝ灰色味をおびた白色で厚くない。その他、同形態と思われる椀片は数点ある。

絵付磁器（132）　高い高台のつく椀形態と思われが、白磁的な釉薬が厚くかかり、その上を、赤茶色、淡青緑色の絵付花柄が施されている。胎土は白色を呈し、完全に磁器質を呈し、堅緻である。明末の色絵の系統と思われる。

常滑甕（55・135）　茶褐色の色調をもち、強く張る胴部にN字状の口縁部を有する常滑窯特有の甕の形態をもつ。135は口径40cm前後であるが、55は口径50cm以上の大甕に属するものである。135ではN字状口縁は退化し、幅広い縁帯を形づくり、最も新しい時期の常滑に入れられるものである。

常滑鉢（134・136～139）　口径16cm前後の小形のものと、口径26～30cmの通常の大きさのものとに分けられる。いずれも破片であるが、片口であることは確認し得た。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整がゆきとどいているが、口縁部以下の外面は不調整でオサエによる指頭圧痕も所々にみられる。胎土には石粒を少量含む。

鉄釉摺鉢（140・141）　口縁部の形状は不明であるが、内面に10本単位の掻き目の施されたすり鉢と思われる。全体に薄めの鉄釉（渋釉）がかかる。内面は使用痕がよくみられ、かなりすり減っている。

(4) 瓦　　器

椀（54）　断面逆三角形の小さな高台をもつ瓦器椀の底部で、見込み部に雑ならせん暗文が施されている。小片で定かでないが、胴部内面、口縁部内面にジグザグ状の細いヘラミガキ（暗文）が施されるものと思われる。色調は暗灰色を呈し、胎土は緻密である。

椀の他、瓦器小皿と思われる小片が１点みられる。

5　石　製　品

茶臼（142・133）　茶臼は、上・下臼１点づつ出土しており、142は上臼である。磨面はいちじるしく磨滅しており、わずかに磨目と思われる細い溝が、放射状に残されているにすぎない。側面には、「横打込み式引き手」用と思われる穴が、磨面より１cmの位置に穿たれている。また、破損面の一部に磨かれた面が見られ、破損後、砥石として再利用されたものと思われる。143は下臼であり、受け皿より磨面の突出がほとんどないほどに磨滅しており、磨目もまったく見られない。上・下臼共に砂岩質であり、側面は一部残っているように、のみによる荒仕上げの痕がみられる。磨面の半径は同じく７cmであることを考えれば、上下一組であったと思われる。さらに、２点共、火をうけたと見え、全体的に赤化しており、一部は煤により黒くなっている。

殻磨臼（145・146・149・150）　145・146は上臼、149・150は下臼である。145の磨面は磨滅のため、磨目はほとんど見られない。また、使用時の癖か、かなりひどく片減りしている。磨面の「ふくみ」は1.2cmを計り、側面には「横打込み式引き手」用と思われる穴が穿たれている。146の磨面もかなり磨滅しているが、７溝と８溝の２分画の磨目が見られ、磨面の「ふくみ」は 1.6 cmを計る。また、「殻落し」があり、磨目と「殻落し」の方向により、一般的な、反時計方向廻しの臼であったことがわかる。側面には、145同様、「横打込み式引き手」用の穴が穿たれているが、磨面が磨滅により、穴まで達している。中心の「ほぞ穴」は上面まで貫通している。149の磨面には、５溝と６溝、２分画づつの磨目が見られ、全体としては６分画であろうと推定される。磨面の「ふくみ」は、0.8cmと少なく、厚さも薄く、よく使用されたものと思われる。また磨面は145同様、片べりしており、石質も類似していることから、上下一組であると考えられる。「ほぞ穴」は貫通しており、下部の「えぐり」は大きい。150は７溝８分画と推定される。太目の磨目がよく残されており、「ふくみ」はほとんどない。「ほぞ穴」は貫通しており、「えぐり」は小さい。下臼、２点共に反時計回りの一般的回転方向を持つ。図示した他に、$\frac{1}{4}$片ほどの上臼２点、半割の下臼１点が出土しており、半割の上臼が表採されている。上臼２点共に「ほぞ穴」は貫通しており、内１点には「殻落し」が見られる。表採の上臼にも「殻落し」が見られ、側面には「横打込み式引き手」の穴が穿たれており、146同様に、磨滅のため磨面が穴まで達している。「ほぞ穴」は浅い窪み程度に穿たれている。下臼は150と同じく厚さ10cmを計り、「ふくみ」もほとんどない。「ほぞ穴」は太く貫通しており「えぐり」は小さい。磨目は上下臼いずれも、６～８溝８分画と推定され、回転方向は反時計回りである。大きさは、図示したものも含め、直径25～30cmと推定され、およそ９寸が基準ではないかと思われる。上臼は厚さ５～10cmで薄く、側面「

引き手」の穴まで磨面が達している例もあり、磨面のよく磨滅した茶臼共々、非常に長期間に渡る使用、または使用頻度の高かったことを示している。磨目は近畿地方に多いとされる８分画のものが主体を占め、６分画は１点と少ない。また上臼の「ほぞ穴」が貫通する例が３点見られ、特徴的であるが、いかなる理由によるものか不明である。石質はすべて安山岩質と思われ、火を受けた痕跡は見られない。これは、茶臼とは違った状況の中で破棄されたものと考えられる。さらに、破損状態は図示した下臼２点と、表採上臼がほぼ半割されており、放棄時に「魂抜き」として割られたものではないかと考えられる。

五輪塔（144）　火輪部と思われ一辺18cmを計る。上面には、風輪部と接合のためか、直径６cm、深さ４cmの穴が穿たれている。当遺跡出土の五輪塔各部の中では最も破損が少なく、火を受けた痕跡もない。図示したもの以外には、火輪部１点、火水輪部２点、地輪部と思われるもの１点が出土している。火輪部は下面全体に深めの穴が穿たれている。火水輪部の内１点は、全高26cmを計り、最大である。上面には隅丸方形、下面は全面に浅い穴が穿たれている。他の１点は、水輪部がほとんど破損しており、全高12.5cmを計る。地輪部と思われるものは、一辺10cmを計る立方体で上面に直径８cmの円形突出部をもつ。側面中、２面がよく磨られており、砥石として使用された可能性がある。岩質はすべて砂岩であり、いずれも火熱を受け赤化、もしくは煤により黒くなっており、火を受けている。

砥石（147・148）２点共に小形で、正面および両側面を使用し、背面は大きく割れている。147正面には浅い円形の窪みが見られ、頁岩製と思われる。148は泥岩であろう。他に、砂岩質で直方体、硬砂岩質で不整形の砥石があるが、２点とも他の破損品を転用したと思われる。さらに１点、不整形の一面に直径６cmの丸窪みの磨面をもつもつものがあるが、その用途は不明である。

石硯（74）　縦12.6cm、横9.4cm、四方対称位置にえぐり込みのある形態で、四葉硯とよばれるものである。上面硯部ともに厚さの約$\frac{1}{2}$を欠くもので、形態の詳細は不明であるが、およそ復元図示したようなものと思われる。石質は、頁岩、あるいは粘板岩系のものと思われ、硬く緻密である。

6　その他

土錘（49）　長さ5.2cm、最大径1.6cmの細長い土師質の土錘で、中央に径0.5cmの穴が貫通している。土錘片としては、この他、同形態のものが２～３点ある。長さ約10cm、径約３cm程ある、大形の土錘片も一点出土しているが、土錘の出土量は、極少といえる。

V　結　　語

今回の調査は、道路幅部分のみという限られた線的調査のため、勿論、遺跡の全容、性格等を決定づけることは困難である。しかし、全地区において建物址、溝、井戸等、当時の生活を如実に物語る遺構、あるいは、多種多様な遺物を検出している以上、多少の憶測を混じえる危険を感じながらも、山添遺跡の遺構全体の性格付け、及び、遺跡の歴史的考察等について若干ながら触れておきたい。

1　遺構・遺物について

まずＡ地区においては、ＳＤ５、ＳＤ８、ＳＤ11といったほゞ並行して走る３条の溝が検出された。ピット群は、ＳＤ５の北側にみられ、ここに居住空間があったことがわかるが、ここは地形的にはＳＤ８を境に一段高くなった場所である。おそらく他と溝で区画されたこうした居住空間の占地形態は当時の一般的な在り方なのかも知れない。そして、それに付随する生活上の必須条件とも言える水（井戸址）が、Ａ地区南半部より３基検出されている。ＳＥ15については発掘区の南限にかかり、調査不能であったが、ＳＥ10、ＳＥ14については、堅固な石積み井戸であった。この両者は、形態的にも、又、石組内、掘り方埋土内土器の型式に大差なく、加えて、素掘りでなく石積みという耐久性を考慮しても、短期間につくり替えたというより、ほゞ同時期に共存していたものと解釈したい。居住空間の拡がりよりみた集落の大きさ、又、南北朝～室町時代前半という戦乱のつづいた社会情勢下にあって、水はむしろ貴重な物資として、数基の井戸が最も水の出易い処に複数掘られていたも何の不思議もあるまい。又、Ａ地区では発掘区南端に近い処で、方形（コの字形）の石組遺構（ＳＰ19）を検出した。これを水溜址と考える点については、同様の石組遺構をＣ地区において３例検出しており、のちにもう少し触れてみたい。この水溜址と考えられるものは、Ｃ地区検出例でも同様なことが言えるが、溝との関連（連結、結節）の中で捉えられるようである。このＡ地区の場合、ＳＤ17がそれにあたるが、この溝には川原石の埋没、散乱が多く、その規則、秩序性は認められなかったが、原状においては石組溝であった可能性も考えられる。Ｂ地区については、遺構全体のまとまりを捉えにくいが、やはり、ＳＤ23と棟方向が並ぶＳＢ25のような建物址がみられる。このＳＤ23もＡ地区のＳＤ17と同様、川原石の埋没が多量にみられ、これについても本来は石組溝であった可能性を考えている。又、ＳＤ23は南に拡張部をもち、特にその部分の埋石は多量であった。こうした溝の形状はＳＤ17に類似し、こ

の拡張部に石組遺構（水溜址）の存在を推定したが、現状において把握できなかった。

次に、C地区においては、SD35を基本として区画されたかなり広い居住空間を想定することができる。この居住空間は、さらに東方にも拡がるものと推定され、今回の検出空間は、全体の約$\frac{1}{3}$程と思われる。そして、この居住空間は、SD42、SD43、SD49のような東西溝によってさらに3ブロック位に小区画されている。SD35について、特にSK39より北方に至っては、かなり多量の埋石（川原石）がみられ、石組溝であったものかも知れない。SD40では、溝の北肩に石組溝の一部残骸と思われる石列がみられ、又、SD43においても埋土にかなり川原石を含んでいた。さて、基本的に一条の溝で取り囲む居住空間をさらに小溝で何ブロックかに居住空間を小分することは、その居住における建物の機能の分化、役割分化を明確化したものかも知れない。これはある意味で、所謂、中世城館に一般的な機能、目的別建物配置、居住空間のとり方に類似するものではなかろうか。

次にC地区を特長づける検出遺構としてSP41、SP46、SP48、SX47がある。こうした遺構は県下において検出例もなく、断定しかねる点も多いが、SP41、SP46、SP48についてはA地区のSP19と同様に、一応、水溜址（水溜施設）としておきたい。全国的には、知見によれば、一乗谷朝倉遺跡①、勝沼氏館跡②、桑島館跡③の調査でよく似た遺構がみられる。前二例においては、やはり、溝（排水溝）とのつながり（集結点）においてこうした遺構がみられ、勝沼氏館跡のように数例ある内、溝との関連が定かでなく、単独に存するものがある。朝倉氏遺跡の例は1.8m×1.2mと小さく楕円形を呈する石組施設である。これらはいずれも水溜址と推定されているが、桑島館跡では、形態的に類似しているものの、ここでは地下式貯蔵庫を想定している。

山添におけるSP48は方形と思われ、勝沼氏館跡の例と形態も似ており、埋土に砂を多く含み底は鉄分の多く付着する赤褐色の土質が確認できる点等より過去に水の溜っていたこと、あるいは水の流路を示唆するものと考えられる。SP41、SP46も同様なことが言え、これらをすべて水溜址と断定するには尚、検討の余地を残すが、水に関わる何らかの施設と考えるのが現段階で妥当と思われる。今後の同類の検出に期待したい。さて、SX47については性格不明といわざるを得ない。

当初、石の配置等より中世墓の一部である可能性を考えたが、調査の結果、下部にこれに伴う土坑、焼土、埋壺等の施設も確認できず、SP46・SP48等を構築した後に、その表面に石を配したものと判明し、その可能性は消失した。では何を意味するものなのか？現在の神社境内を散策しても、こうした石の集石をよく眼にする。集石のみといってよい程の簡単な構築物である。一例すれば、三重県神島の八代神社境内には、一個の立岩の前面に、囲りに大きめの石を配し、その内側に小石を敷きつめた方形の集石（配石）の構築物がある。立岩そのものの解釈は別として、こうして限定された空間（集石）はやはり、神の依代としての意味をもつものではなかろうか。こうした現代例をもとに憶測を推しすすめれば、SX47は、その存在位置、条件等より、そ

れは水の集約されるところ（ＳＰ46、ＳＰ48)、つまりは、抽象的に凝集されれば、水の神との関連の中で設けられた祭祀的な遺構とも考えられる。無論、想像にすぎる点も多い。

以上、遺構全体についてのまとめ、問題点等を概述してきたが、溝による小ブロック化のみられる居住空間の在り方と共に、一連の溝にかかわる水溜址の存在、石積み井戸の複数性は、中世における一般庶民の集落パターンとは異なった点をもち、当時のある程度の支配者層をその遺構の背景に感じざるを得ない。これはまた、次にのべる特定遺物の性格上からもつけ加えることができよう。

今回の出土遺物は、量的には土師器（鍋、皿類）が最も多く、又、常滑（鉢、甕)、山茶椀・山皿等の日常雑器類も比較的多い。この点からは一般の中世集落址における出土状況と大差ない。むしろ、消耗率を考えても、土師器の多いことは極く自然なことと言えよう。しかし、ここでは遺跡の性格を考える上で重要と思われる出土遺物について若干触れてみたい。

天目茶椀（平茶椀も含めて）の多いこと、良好な青磁・白磁を有すること、又、石硯（四葉硯）茶臼等の出土は、やはり、遺跡を性格付けるにあたり注視せねばなるまい。天目茶椀、茶臼はいずれも茶道具（茶道）にかゝわる遺物であり、鎌倉時代以降、禅僧によって中国よりもたらされた喫茶の流行、浸透という社会的背景を抜きにしては考えられない。しかし、天目茶椀をすべて抹茶茶椀と解することは問題であるが、平茶椀は明らかに抹茶用としてつくられたものらしい。④⑤当時、茶を日常的に取り入れることができた階層、やはり寺院僧侶か武士層に限定されるであろう。次に茶臼であるが、石臼は大まかには、一般的な殻挽き臼、粉挽き臼、及び、茶挽き用の茶臼に３分され、形態、石質等より明瞭に区別される。山添の石臼には粉挽き臼が多く、下臼に受け皿をもつ茶臼が１点出土している。一般に石臼は鎌倉時代以降普及されるが、非常に高価なもので庶民の手には入らず、ひろく普及するに至るのは江戸時代も中期以降と考えられている。⑥ましてや、茶臼はもっと高価なものであったろうし、上層階級を示唆する遺物とも言われている。⑦

次に石硯であるが、石硯は平安時代より出現し、中世に普及する。形態的には方形、円形、楕円形のものが多い。山添出土のものは四葉硯と言われるもので、知見によれば、狐塚遺跡(埼玉)⑧宿ケ谷戸遺跡（埼玉）⑨の他、近年では、吉田近衛町遺跡⑩（京都）にその出土例をみることができるが、珍しい形態と思われる。吉田近衛町遺跡は福勝寺跡に比定されている。三重県内での石硯出土遺跡としては、古里Ｂ遺跡⑪、小判田遺跡⑫、戸木城址⑬、殿畑遺跡⑭があるが、いずれ、方硯、あるいは、楕円硯である。こうした遺物はおそらく一般集落には縁遠いものと思われる。その他、一般集落でないことを示唆するものとしては、胴部に菊花文を配する瓦質火舎片、脚付土師質火舎片等が少量出土している。又、これは、今後の大きな課題ともなろうが、輸入陶磁器としての青磁、白磁、及び瀬戸産、あるいは美濃産と思われる諸々の灰釉、あるいは鉄釉が施された陶器類が、当時、一体、どの階層まで普及、浸透していたかは興味深い。

2　歴史的考察

さて、山添地域を物語る文献史料に乏しいことはIIにおいても述べた。ここでは、こうした制約の中で、又、知り得る資料に基づいて、若干の遺跡に関わる歴史的背景等に触れておきたい。まず第一に、現在も残る字名についてであるが、遺跡所在地の田畑の字名は北より真土、里ノ垣外、辻の内にあたる。この中で気になるのは「垣外」という字名である。垣外は垣内と空間的な違いはあっても、同意味合いをもって名付けられたと考えるならば、中世的な色彩をもった字名といえる。垣内は近畿地方に多いとされ、垣に囲まれた同族集団、村落共同体、集落屋敷の意味をもつものと考えられている。[15] このことは遺跡の性格を考える上で参考となろう。

次に山添が山副と表記されていたことが、『勢陽五鈴遺響』[16]、『飯南郡史』[17]より読み取ることができ、又、飯野郡内の乳熊郷に属していたこともわかる。

そこで、多少時代は下るが、永禄年間、織田信長五万と大軍に備えて、北畠具教国司父子以下、多くの諸将が大河内城に楯こもって50余日の籠城戦を展開した著名な大河内合戦であるが、この多くの従う諸将の内に、「山副氏」の名がみえる。（『伊勢国司記略』[18]）

さて、ここに散見する山副氏の出自はどこであろうか。

> 花木館址霧館址小片野村字木坂ニ在リ往昔北畠氏ノ巨朴木隼人正、野呂信濃守此ニ居ル　霧館址ハ字山際及ビ桐久保ノ間ニ在リ今、田圃タリ往昔北畠ノ臣山副十六兵衛、久保将監等此ニ居ル　『伊勢名勝志』

これより察すれば、山副氏は、飯高郡小片野村（現在の松阪市小片野町付近か）に霧館を構え、ここを本拠としていたとも解せる。しかし、この霧館址は、『三重の中世城館』[19]では不明城館として記され、現在、考古学的に遺跡としておさえられていない。あるいは、全く消滅してしまったのか、記述の誤りであろうか。様々の想像を強いられるが、ともかくも、北畠氏臣下に山副氏という人物の存在は明確であり、現在では、その出自を文献によりたどれないにしても、中世において山副氏という土着的な、ある地域の支配者層が存在していたと考えることに無理はないであろう。又、『北畠家臣録』[20]の中には北畠氏家臣として、山副氏の名が散見する。おそらくその存命時期は、鎌倉末、南北朝時代より、北畠氏滅亡の頃までと考えられるのではなかろうか？

制約された史料はもとより、多くの疑問と矛盾の中で、もしかすると、この山添遺跡が、何らかの形で山副氏に関わる（あるいは、山副氏館跡[21]）遺跡である可能性の一端を窮うことができるようにも思われる。今後の文献史料の探索と加えて、再度、遺構、遺物の総合的な検討を試みたい。

註

① 福井県教育委員会『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅳ』（1973）

② 山梨県教育委員会『勝沼氏館跡調査概報』（1975）
勝沼氏館跡調査団『　〃　〃　Ⅱ』（1977）

③ 石川県教育委員会『桑島館跡・資料編』（1977）

④ 村井康彦『茶の文化史』（岩波新書・1979）

⑤ 瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史　陶磁史篇一』（1969）

⑥ 三輪茂雄『臼（うす）』（法政大学出版局・1978）

⑦ 葛西城址調査団「石臼について」『御殿山通信No.31』（1976）

⑧ 五島美術館『日本の陶硯』（1978）

⑨ 埼玉県教育委員会『関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』（1974）

⑩ 京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概報』（1978）

⑪ 谷本鋭次氏より御教示を受ける。

⑫ 四日市市教育委員会『小判田遺跡』（1978）

⑬ 久居市教育委員会『戸木城址発掘調査報告』（1979）

⑭ 昭和54年７月10日～10月９日まで実施された県道的矢大王線改良工事に伴う発掘調査である。

⑮ 藤岡謙二郎『日本の地名』（講談社現代新書、1974）

⑯ 「山添　中万ヨリ東ニアリ乳熊郷ニ属ス　正税五百七石石津領ナリ、山林ニ副フテ民居スルノ名ナリ　旧記ニ山副ト録ス」『勢陽五鈴遺響４』（安岡親毅）

⑰ 「太古此地を神山或は神戸と称す　後山に添ふて民住する故を以て山添と改む　旧税米高六百三十一石九斗三升ハ合津領なり、或書には山副とも記す　『飯南郡史』（中林正三）

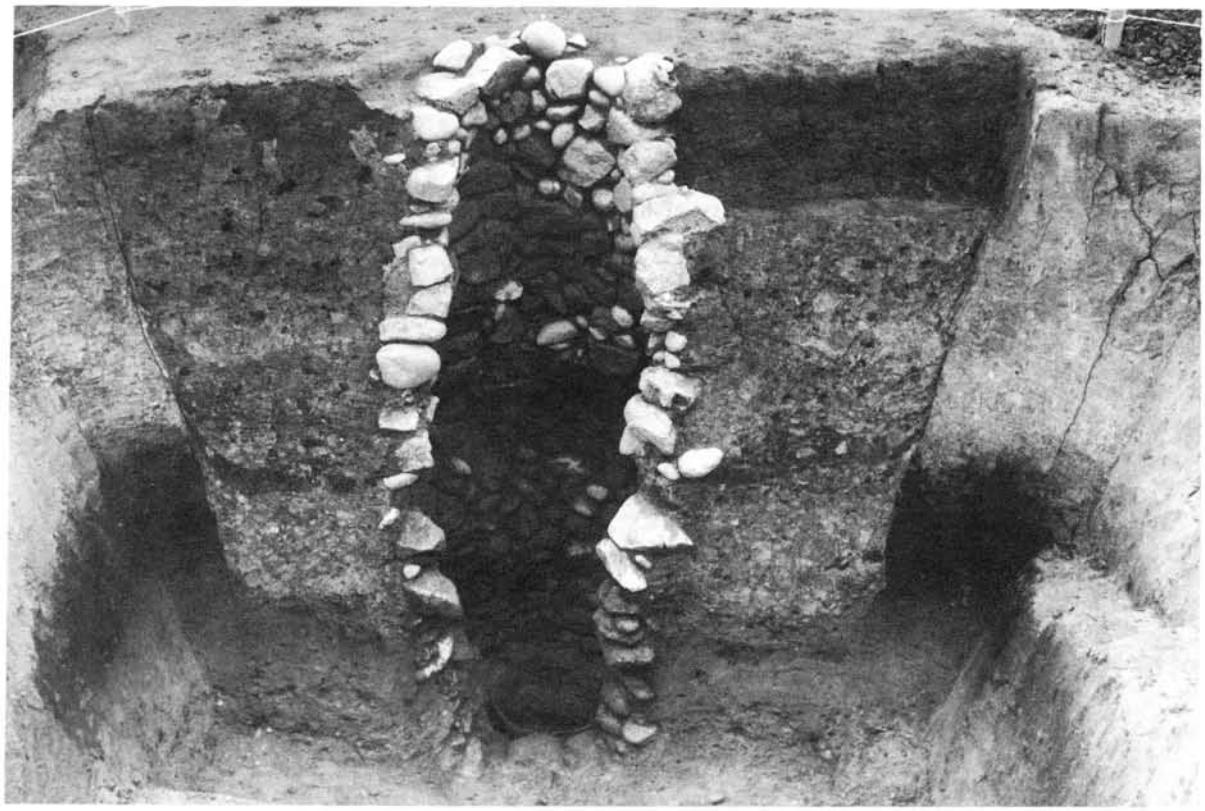
⑱ 「北畠中納言具教卿永緑の末に、織田信長公度々北伊勢へ発向ありて……六呂木、波多瀬、山副、谷、三田……久住、堀立、稲垣以下南五軍の軍兵数を尽して楯籠る。……」『伊勢国司記略』

⑲ 三重県教育委員会『三重の中世城館』（1976）

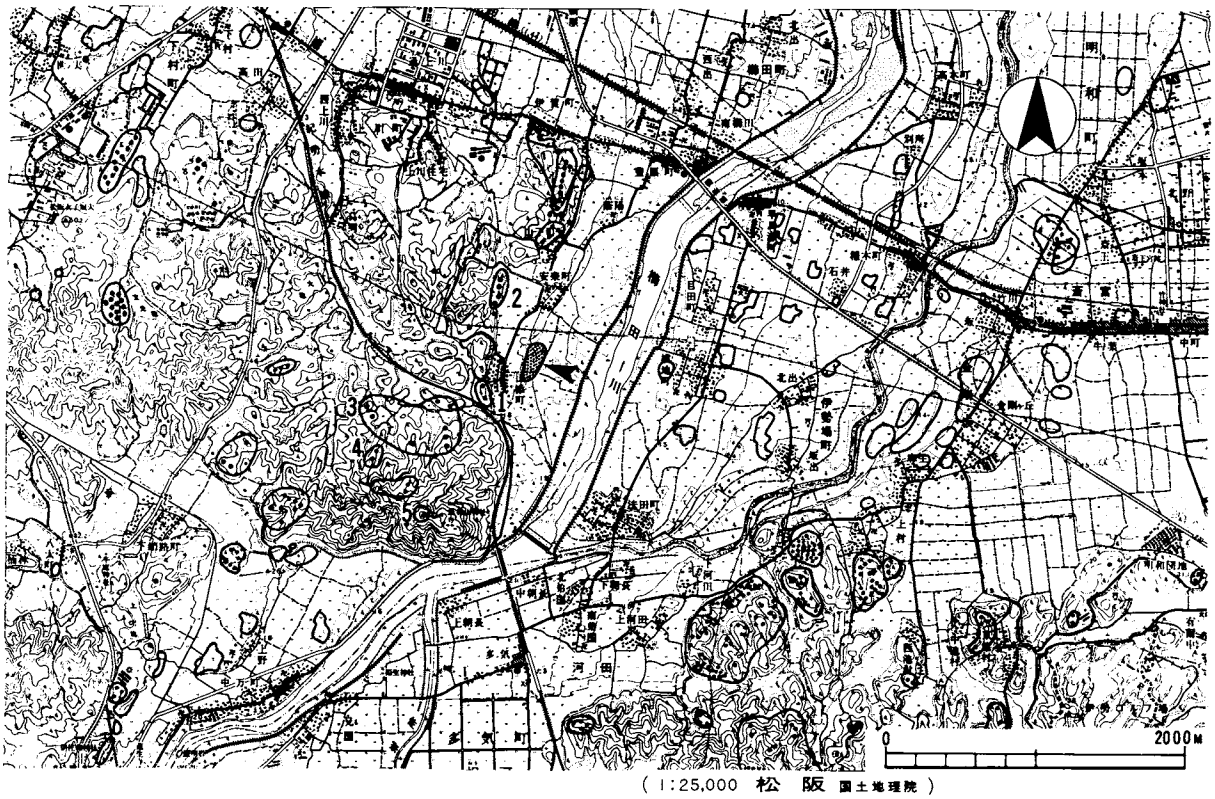
⑳ 樋田清砂氏蔵本『北畠家臣録』

㉑ 居館跡としても、戦時用のものではなく、平時用の麓の居館、すなわち、「根小屋式城郭」的な性格のものと考えられる。（大塚勲「南北朝時代の静岡の城」『日本城郭大系』９　静岡、愛知、岐阜（新人物往来社1979））

図　　版

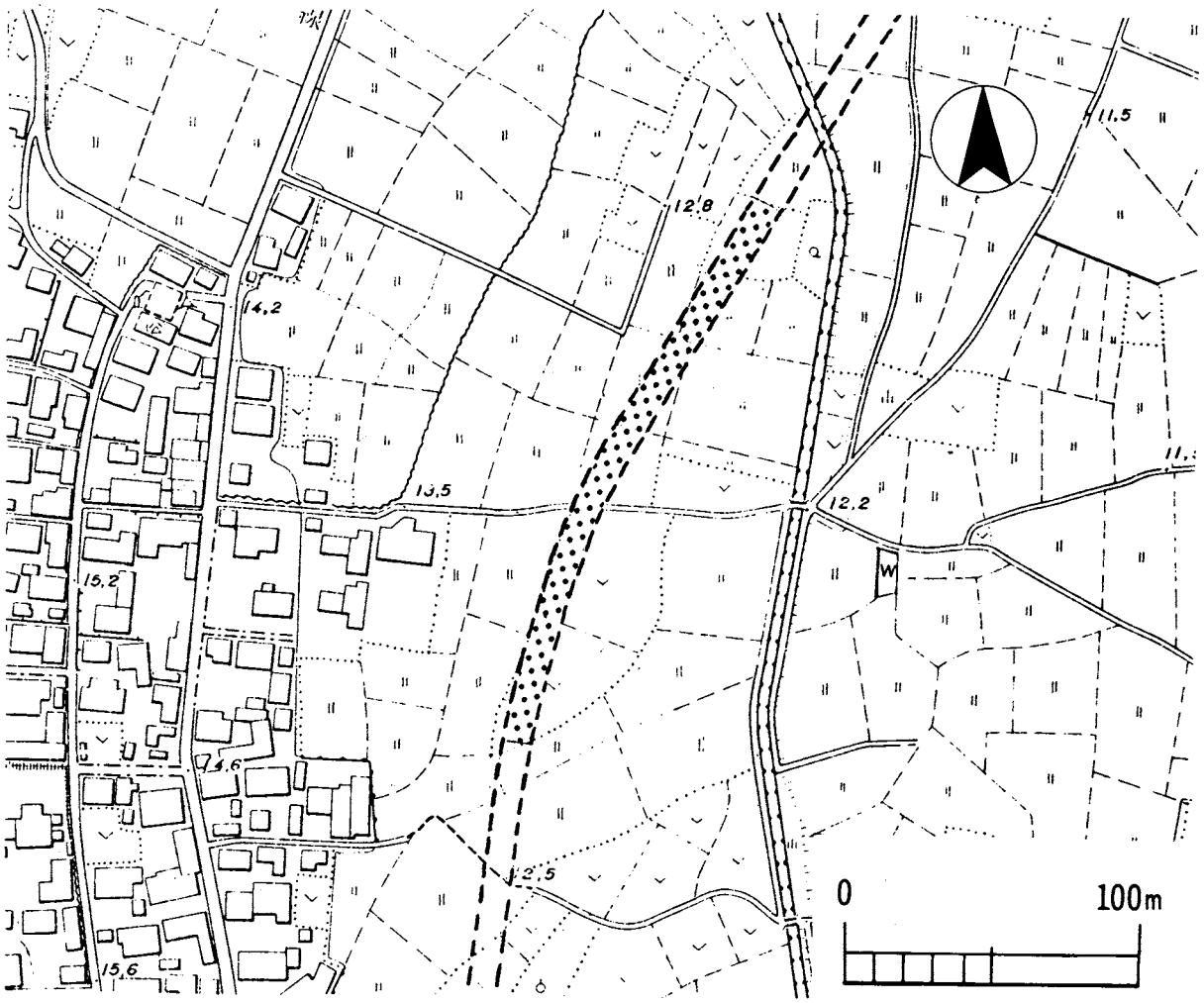


石積み井戸（ＳＥ10）断面



（1:25,000 松 阪 国土地理院）

山添遺跡地形図



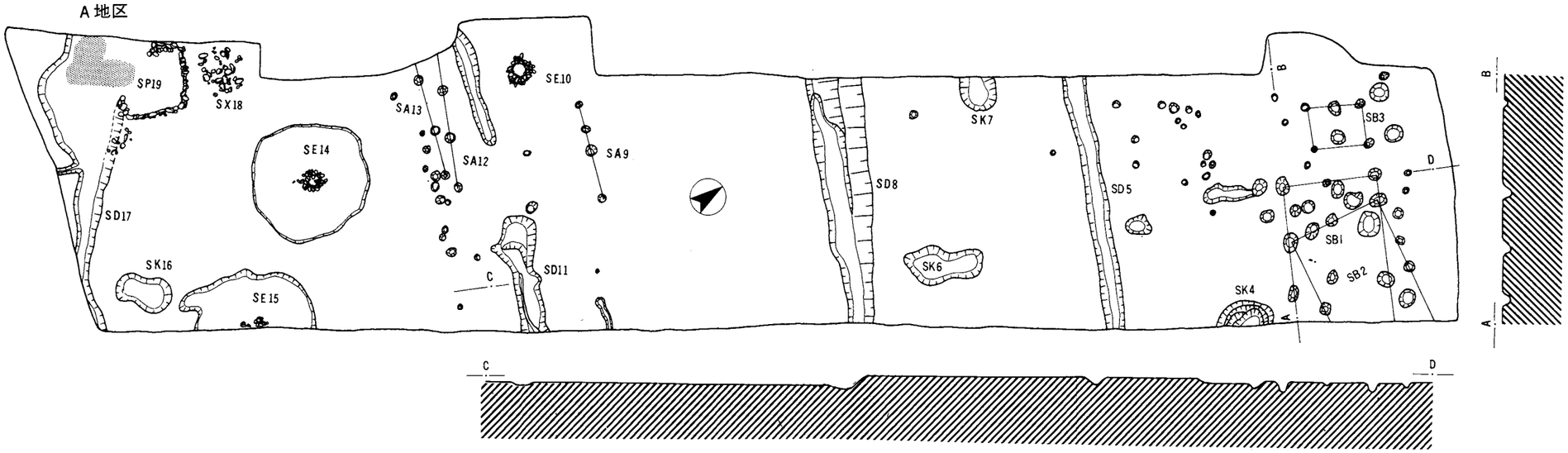
山添遺跡位置図（1：2500）

遺構平面図

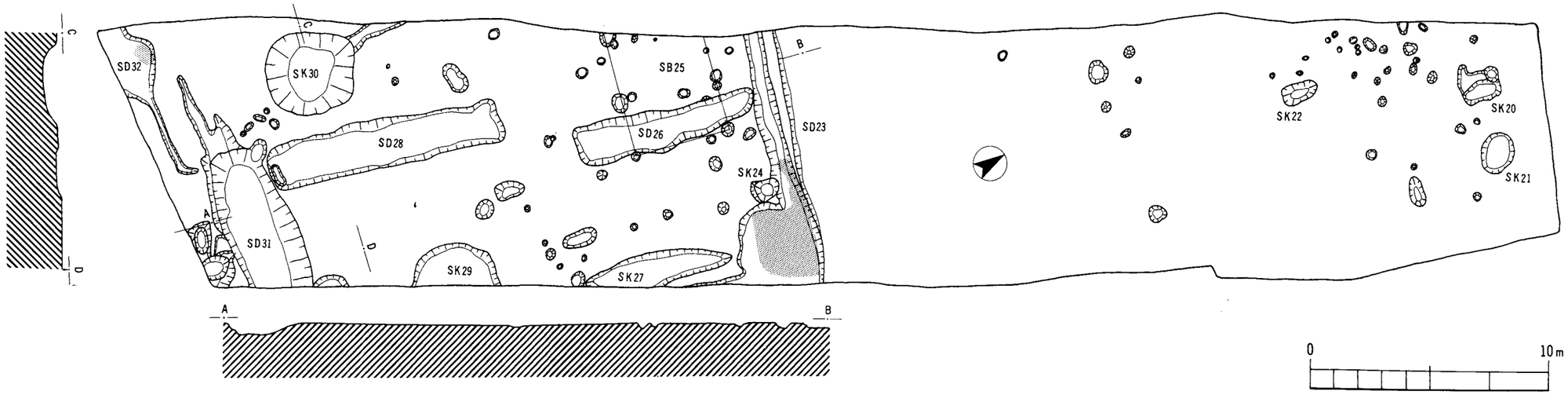
SCALE $\frac{1}{200}$

埋石多量部分

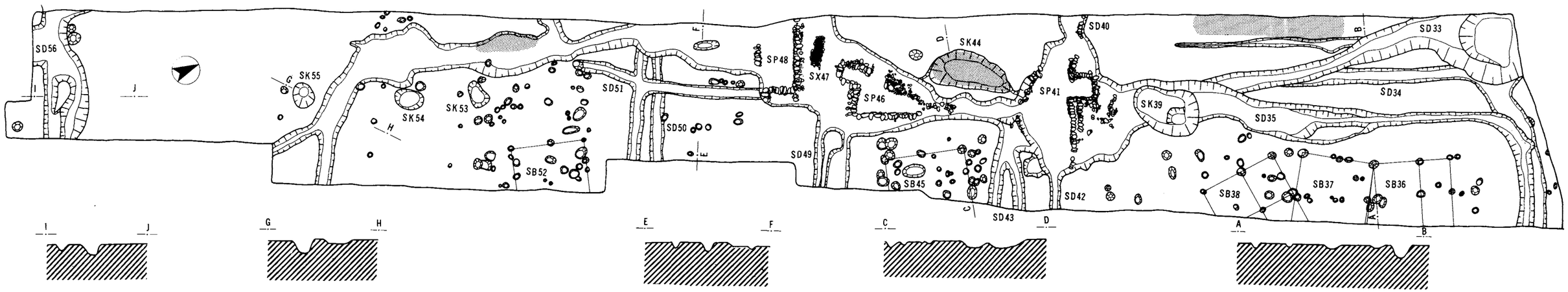
A地区



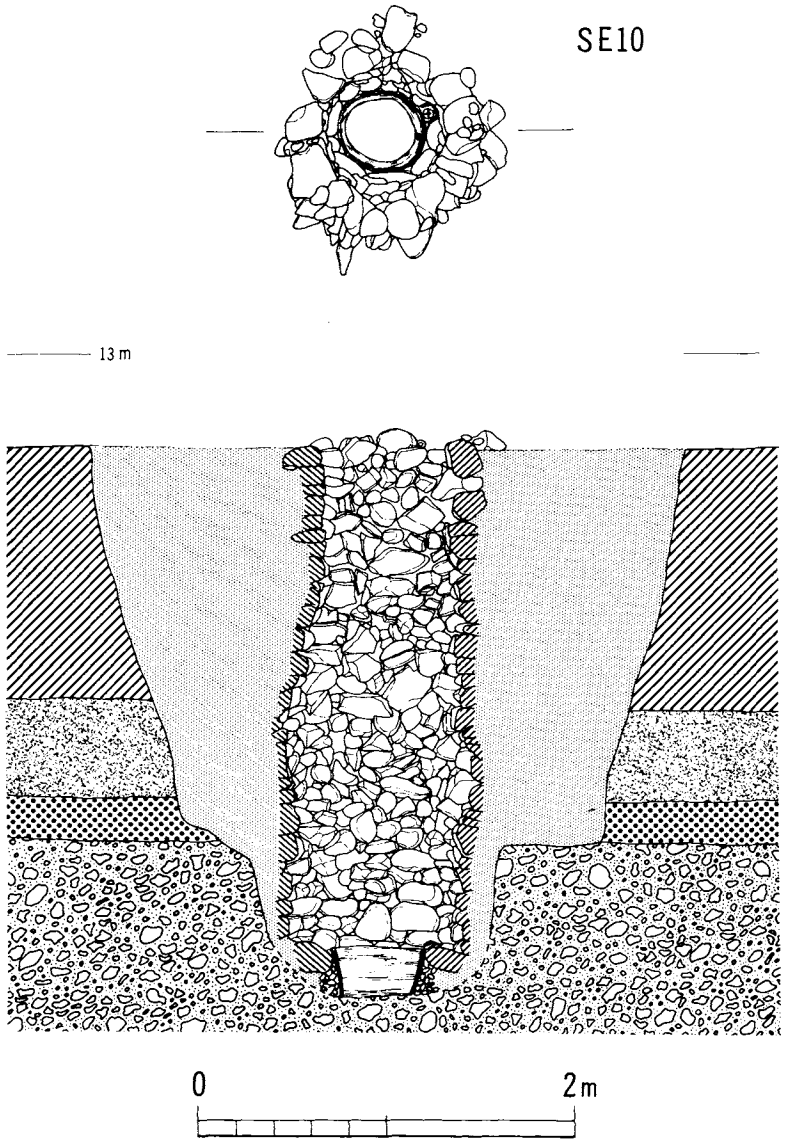
B地区

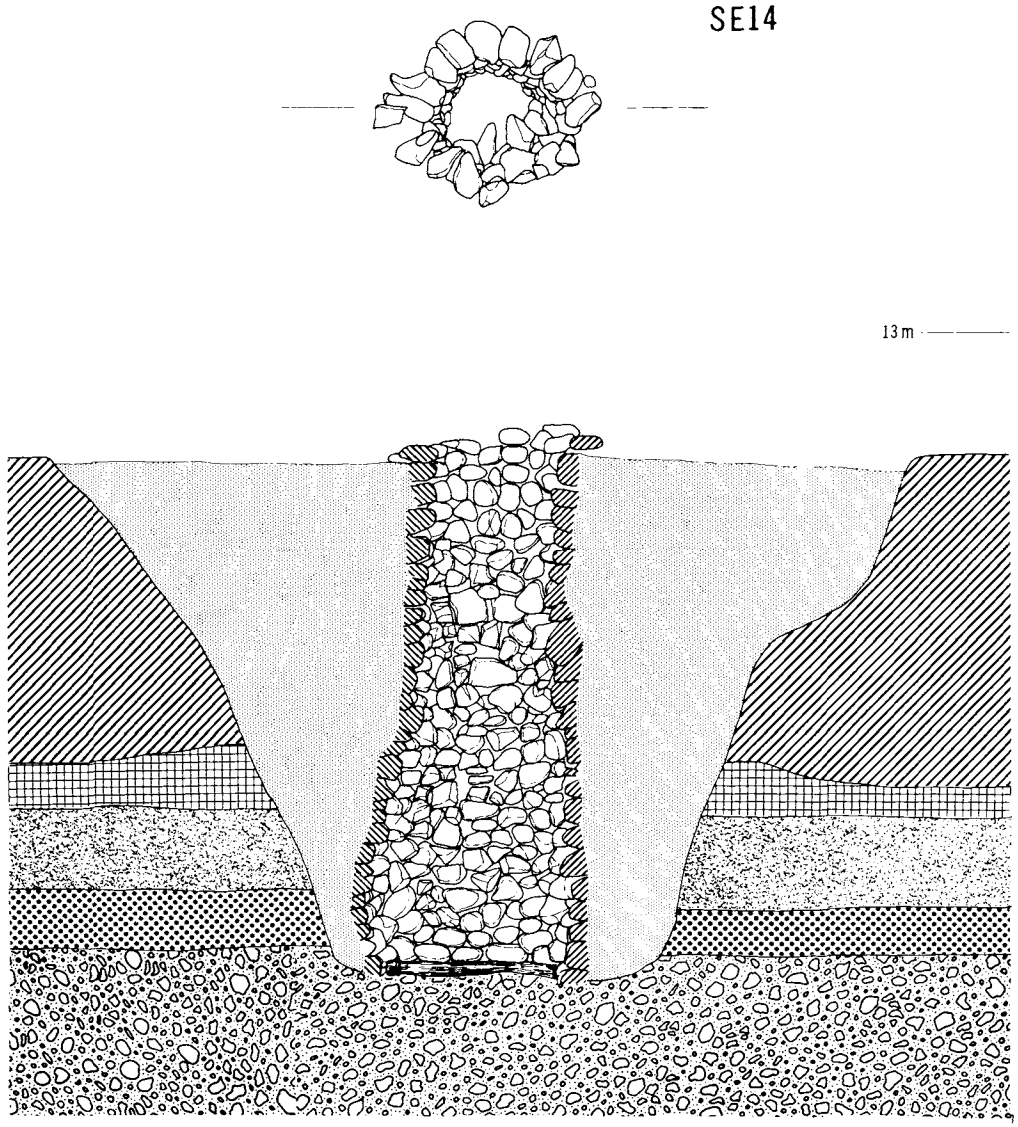


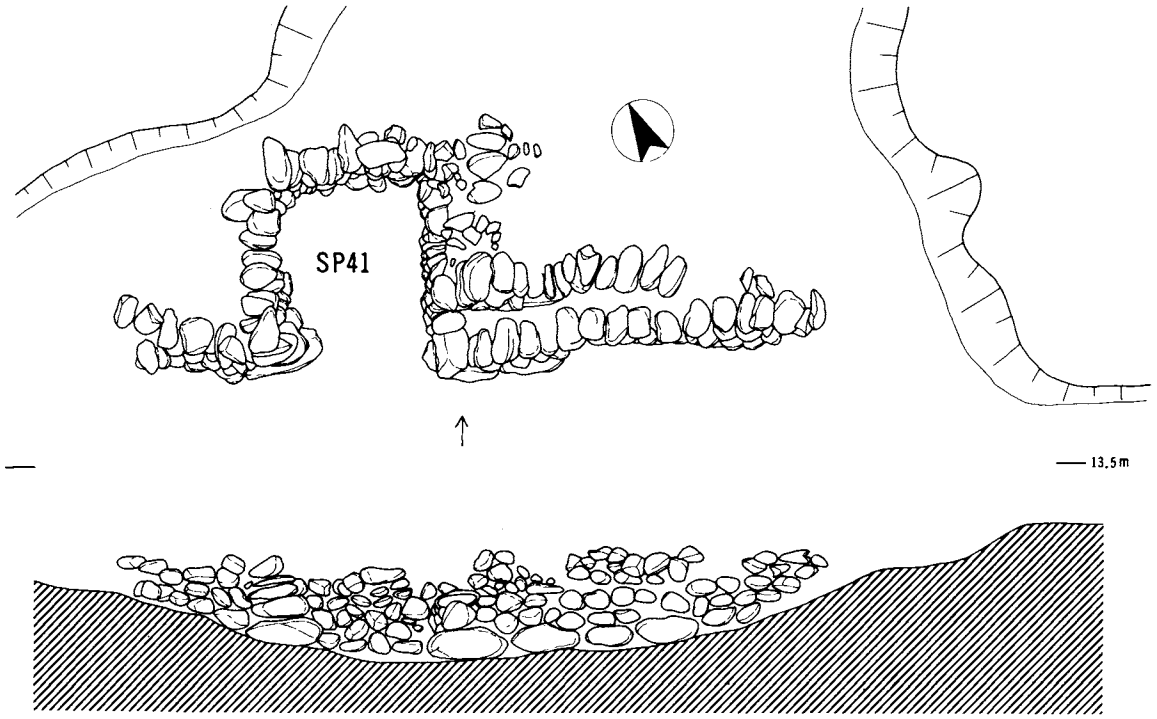
C地区

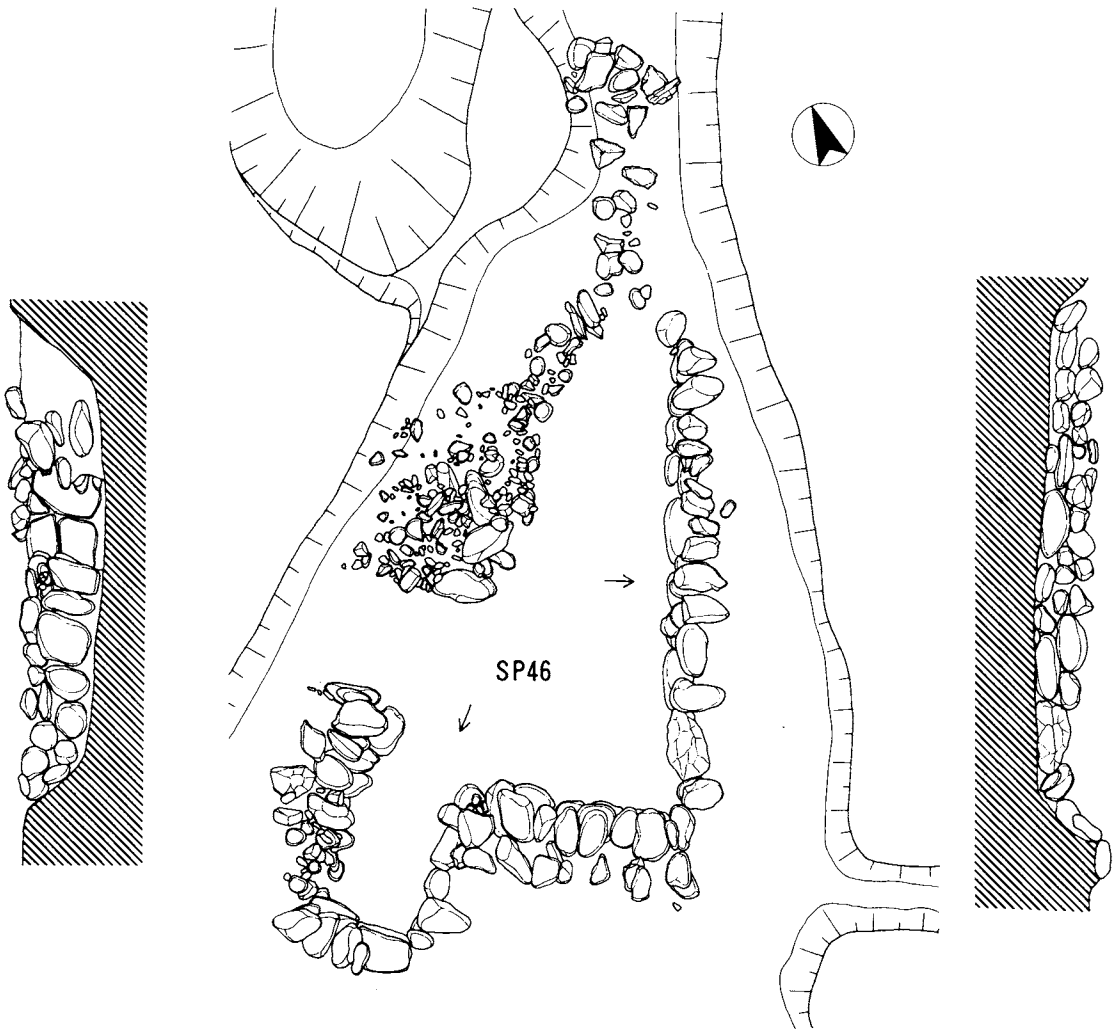


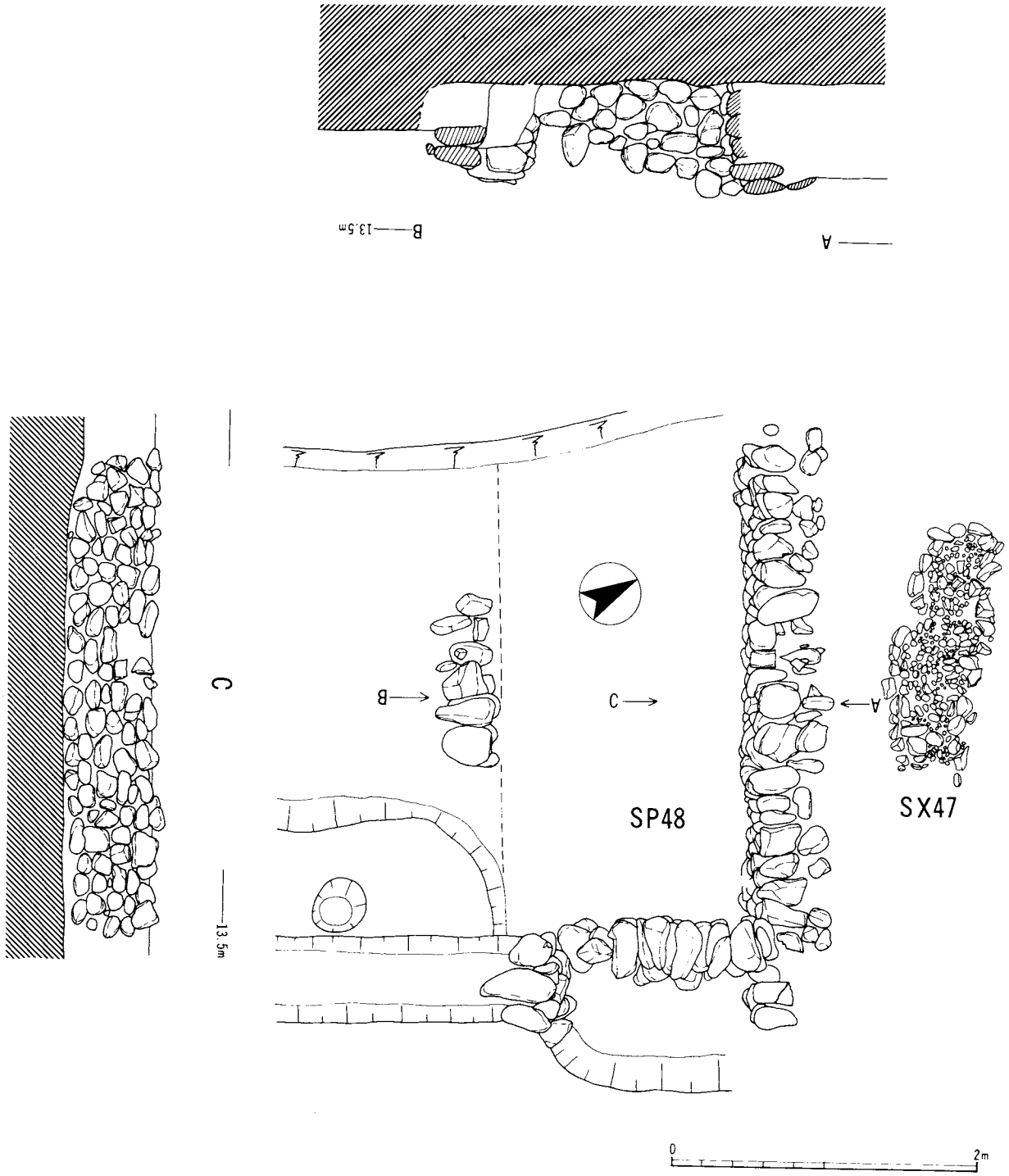
井戸平面実測図・断面実測図（1：40）



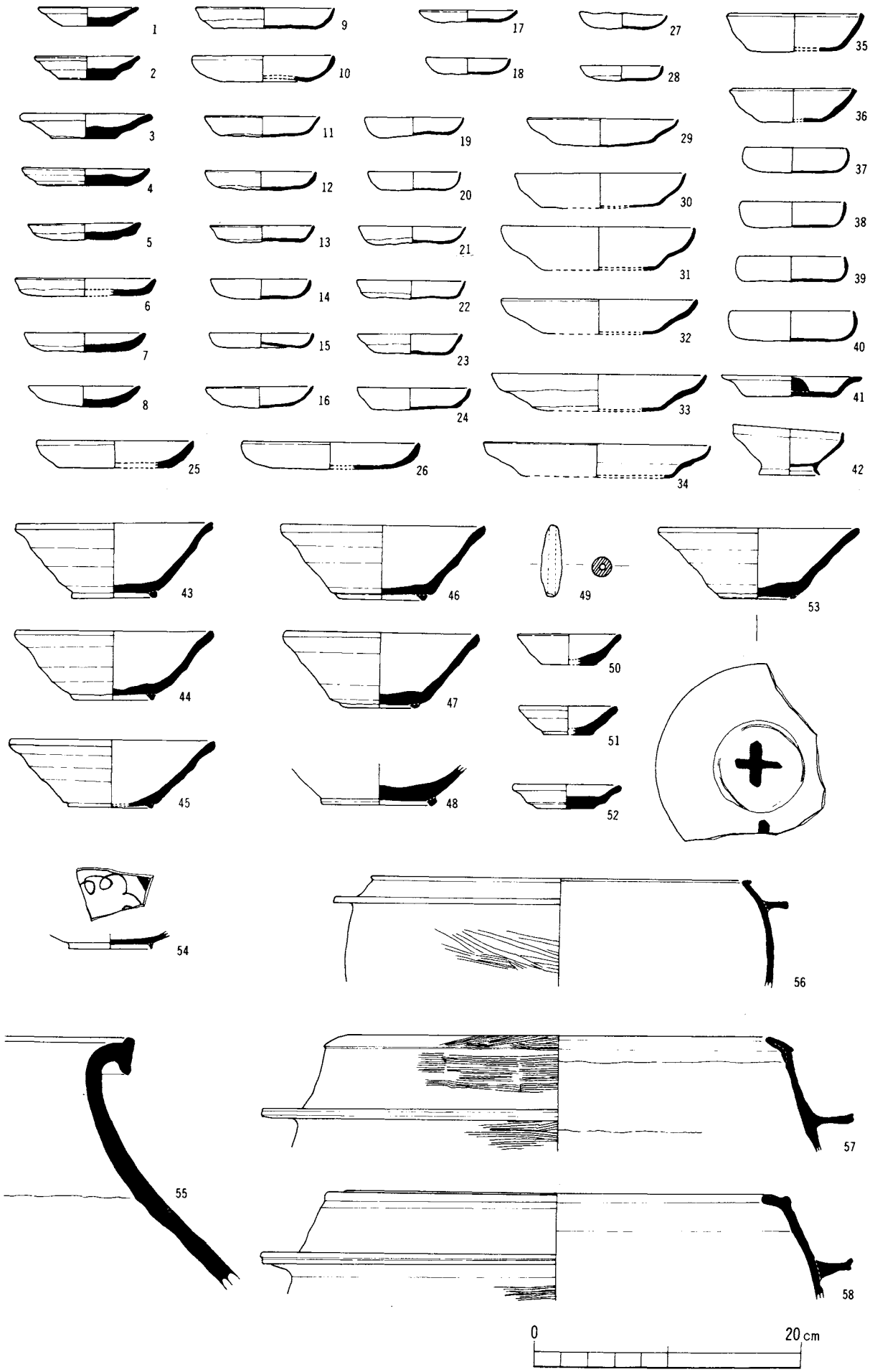



SP41
13.5m

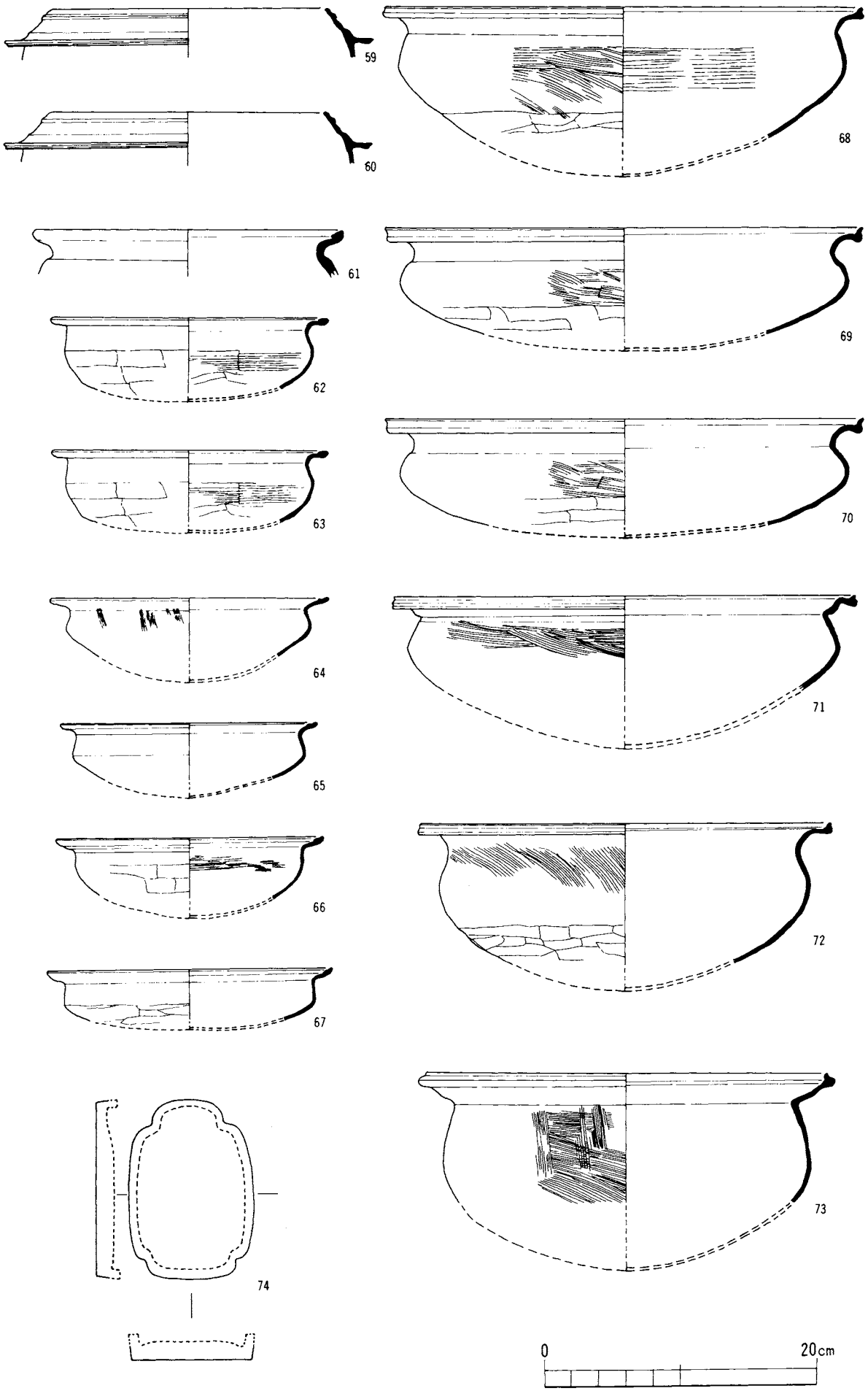

13.6m
SP46
13.4m
0
1
2m



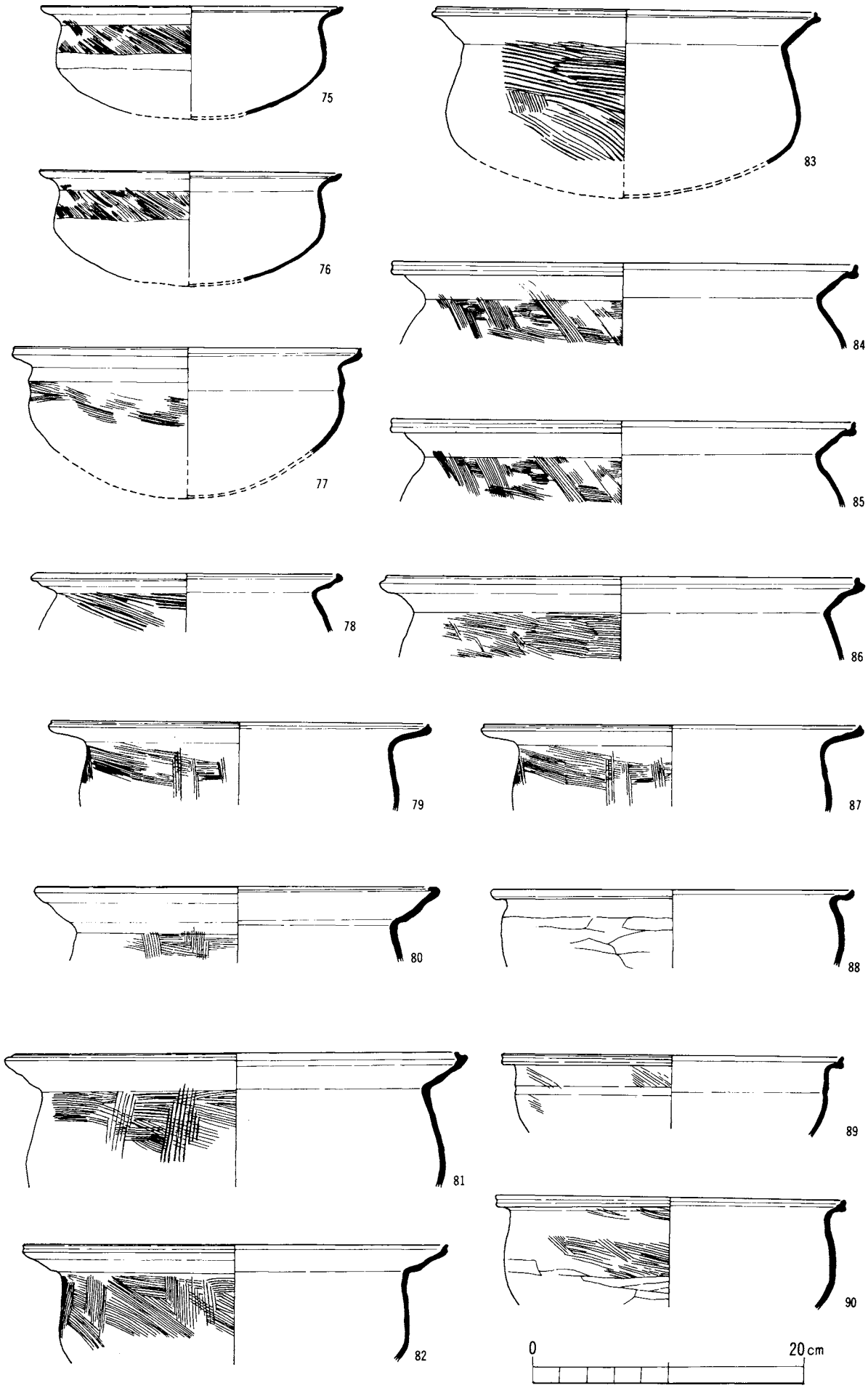
SX47・SP48実測図（1：40）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
20cm

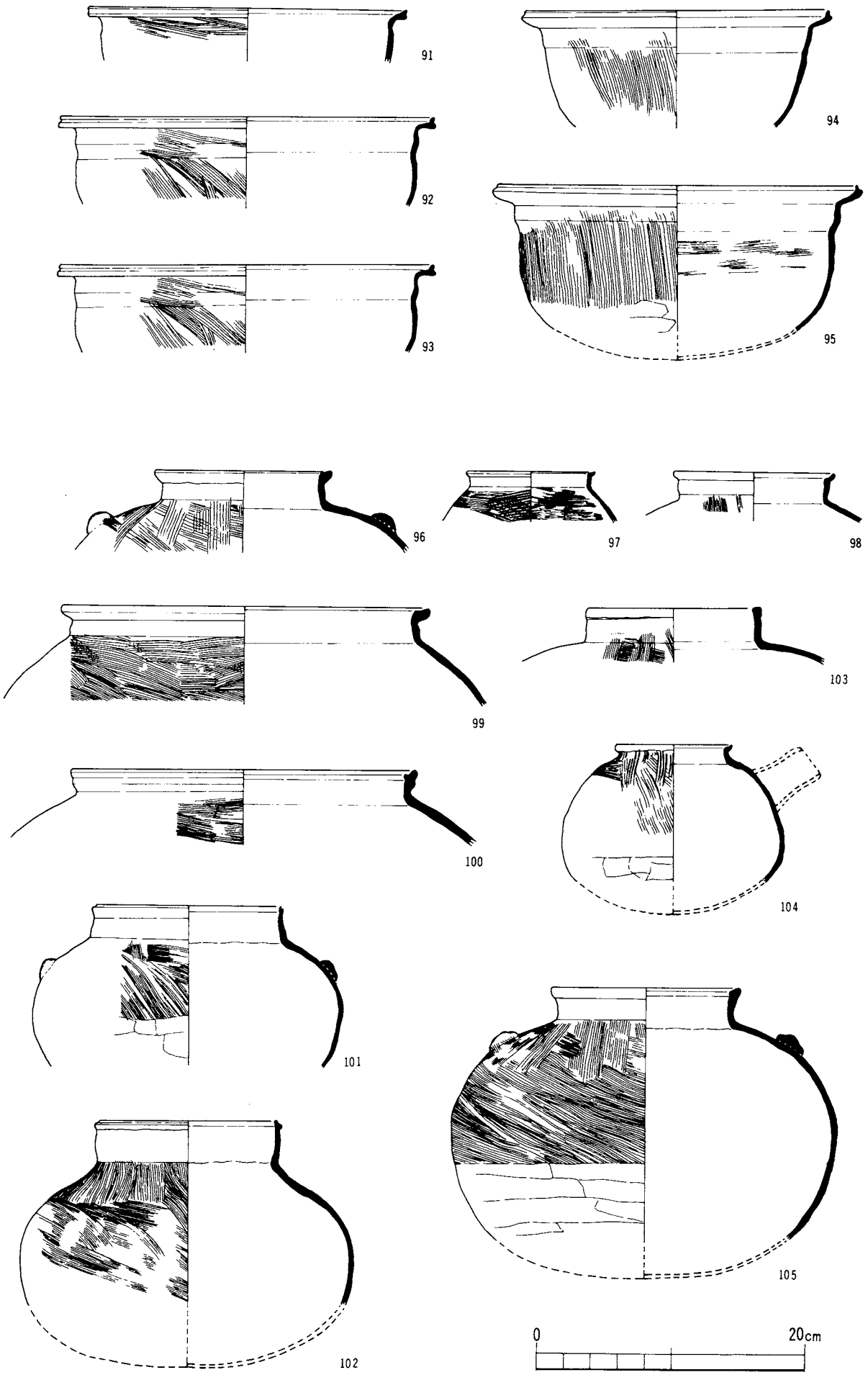
出土遺物実測図（1：4）



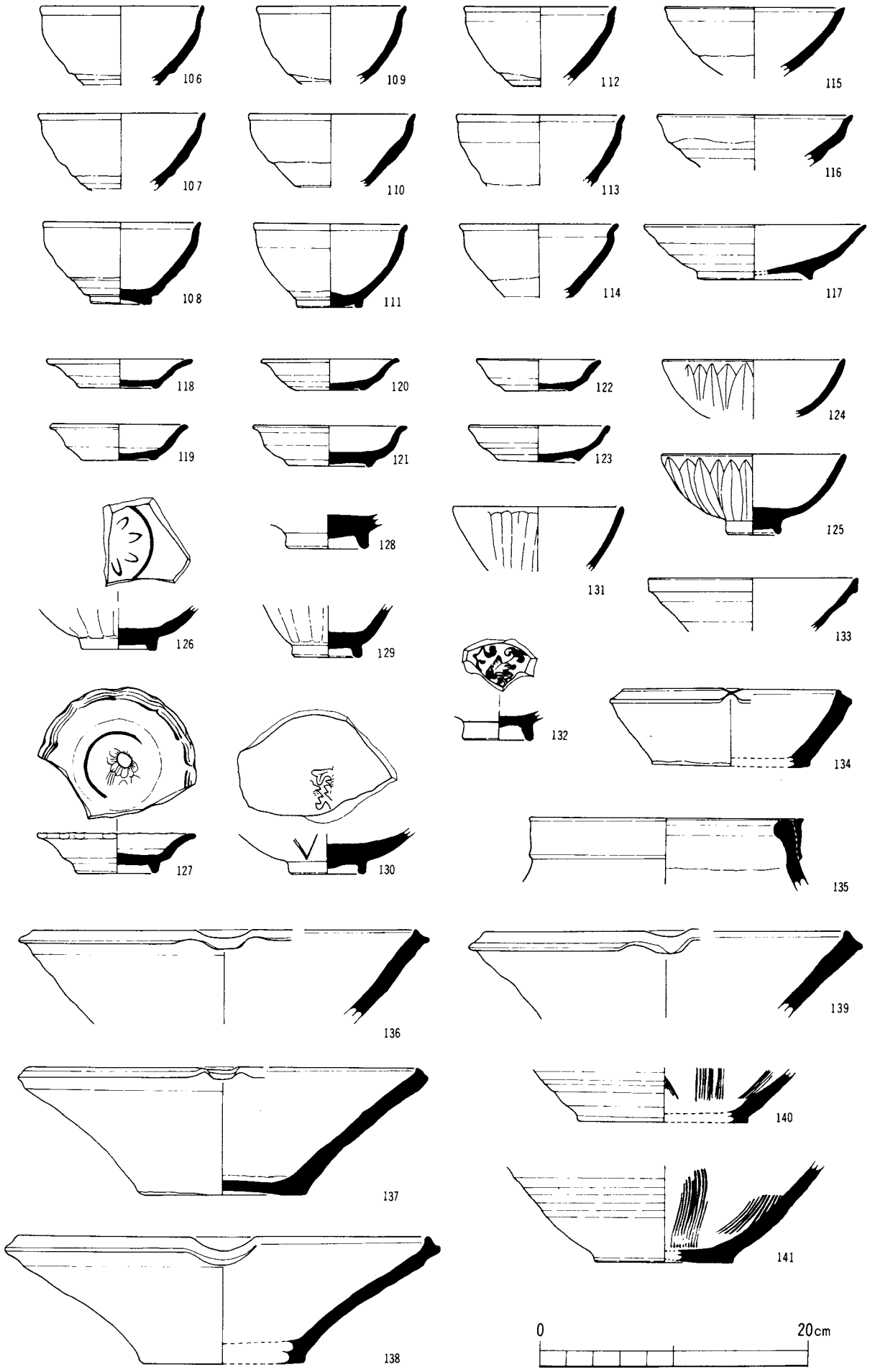
出土遺物実測図（1：4）



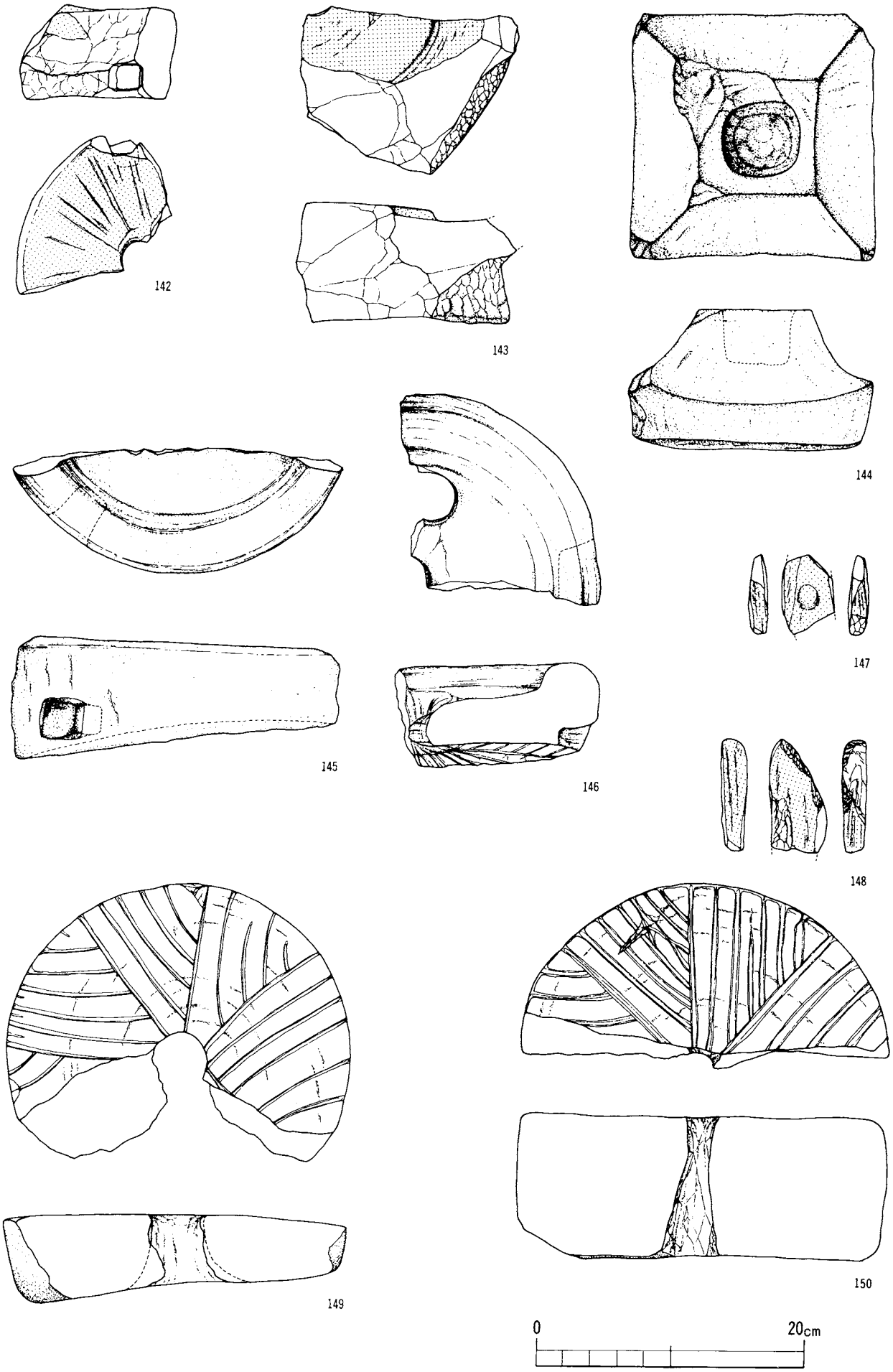
出土遺物実測図（1：4）



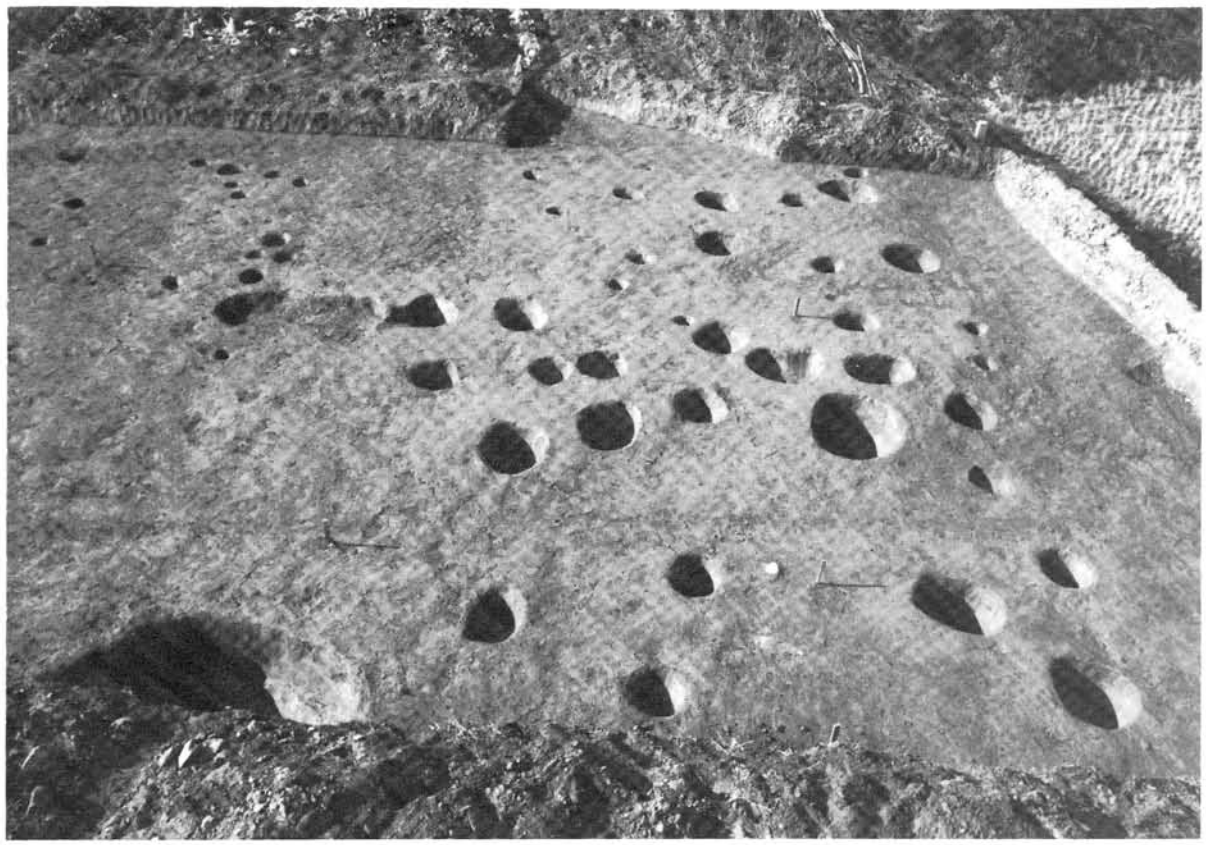
出土遺物実測図（1：4）


106
109
112
115
107
110
113
116
108
111
114
117
118
120
122
124
119
121
123
125
128
131
126
129
133
132
134
127
130
135
136
139
137
140
141
138
0
20cm

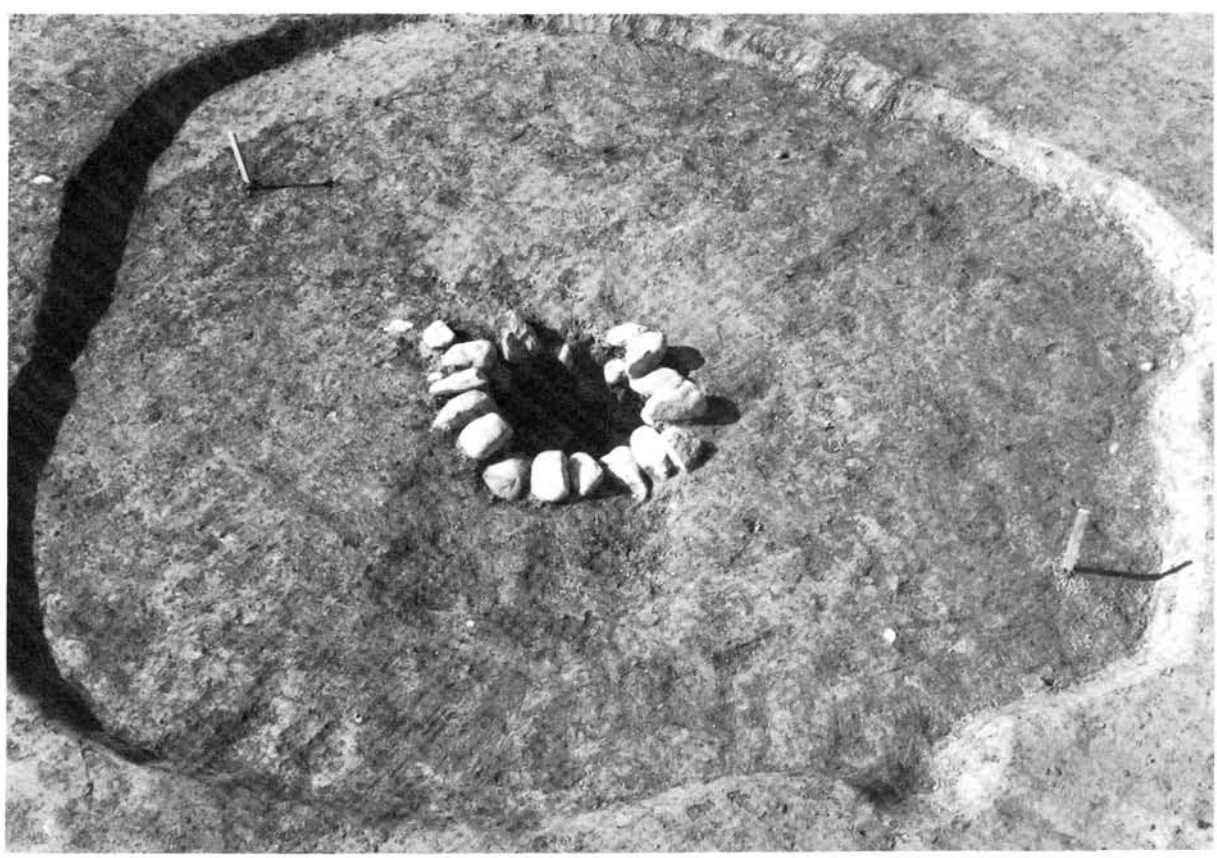
出土遺物実測図（1：4）



出土遺物実測図（1：4）



SB1，SB2，SB3（東より）

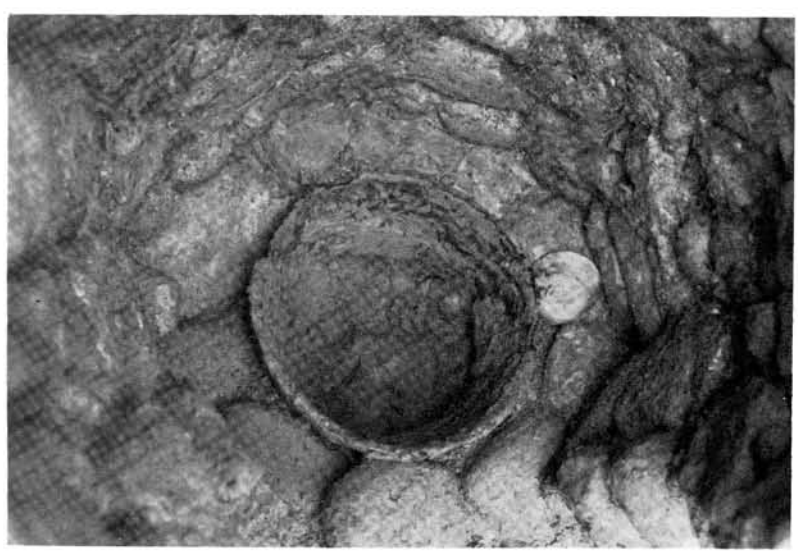


SE14

A地区北半（南より）

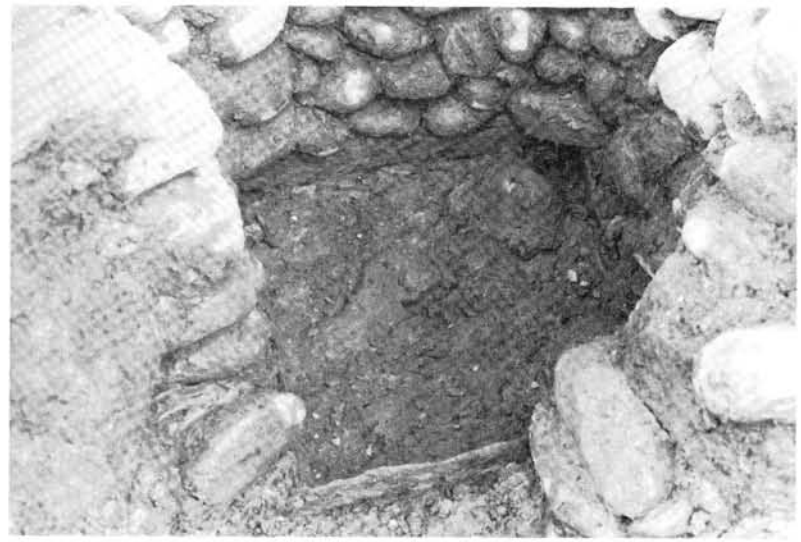
A地区全景（南より）

SE10
断面（東より）



SE10底

SE14
断面（西より）

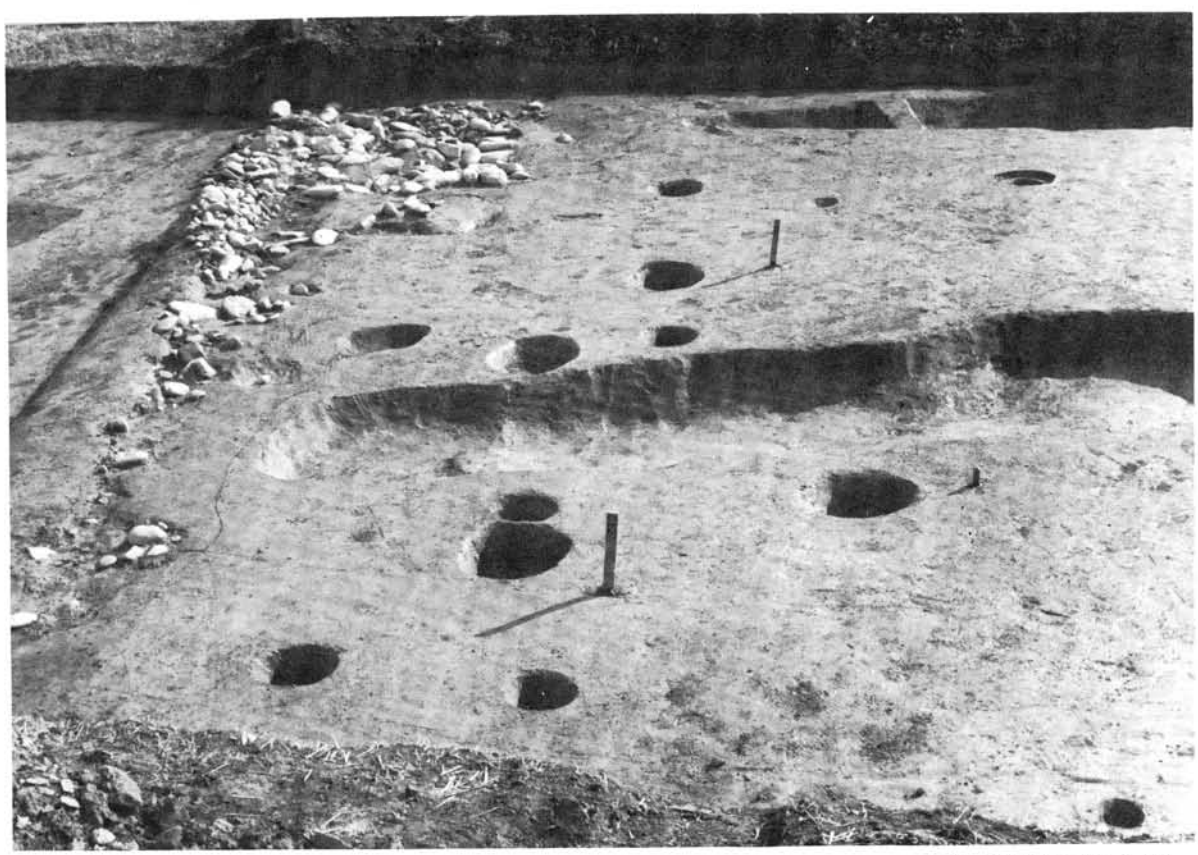


SE14底

SP19内側集石状況

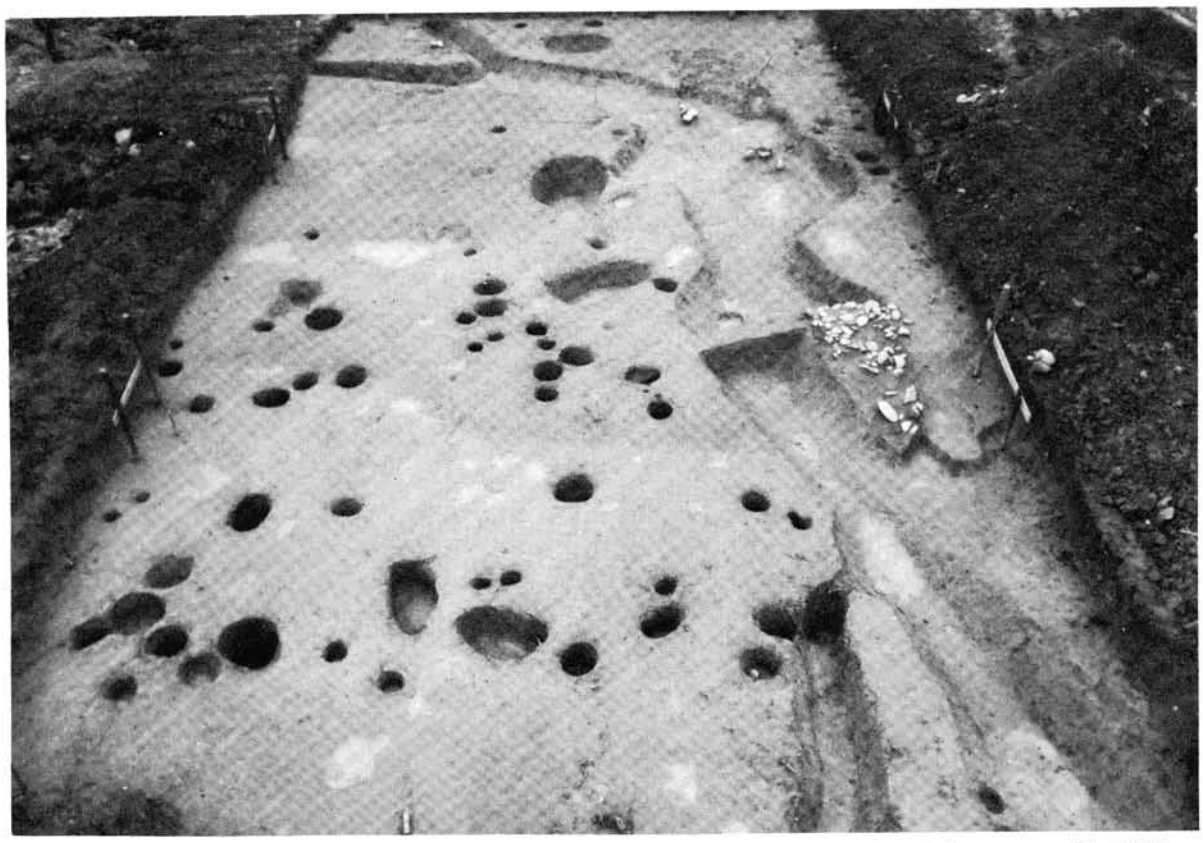
SP19

B地区南半（北より）



B地区中央部（西より）
SD23埋石状況他

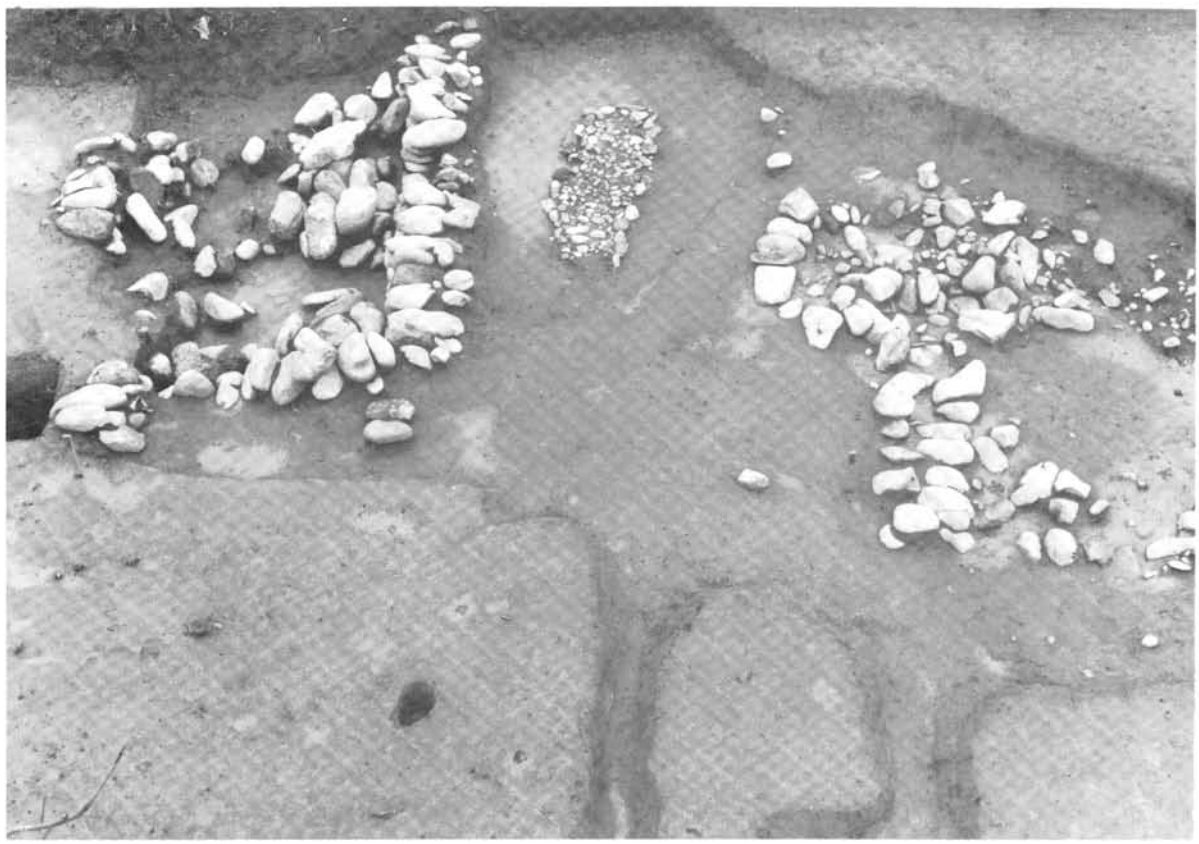
C地区全景（北より）



C地区南半，SB52（北より）

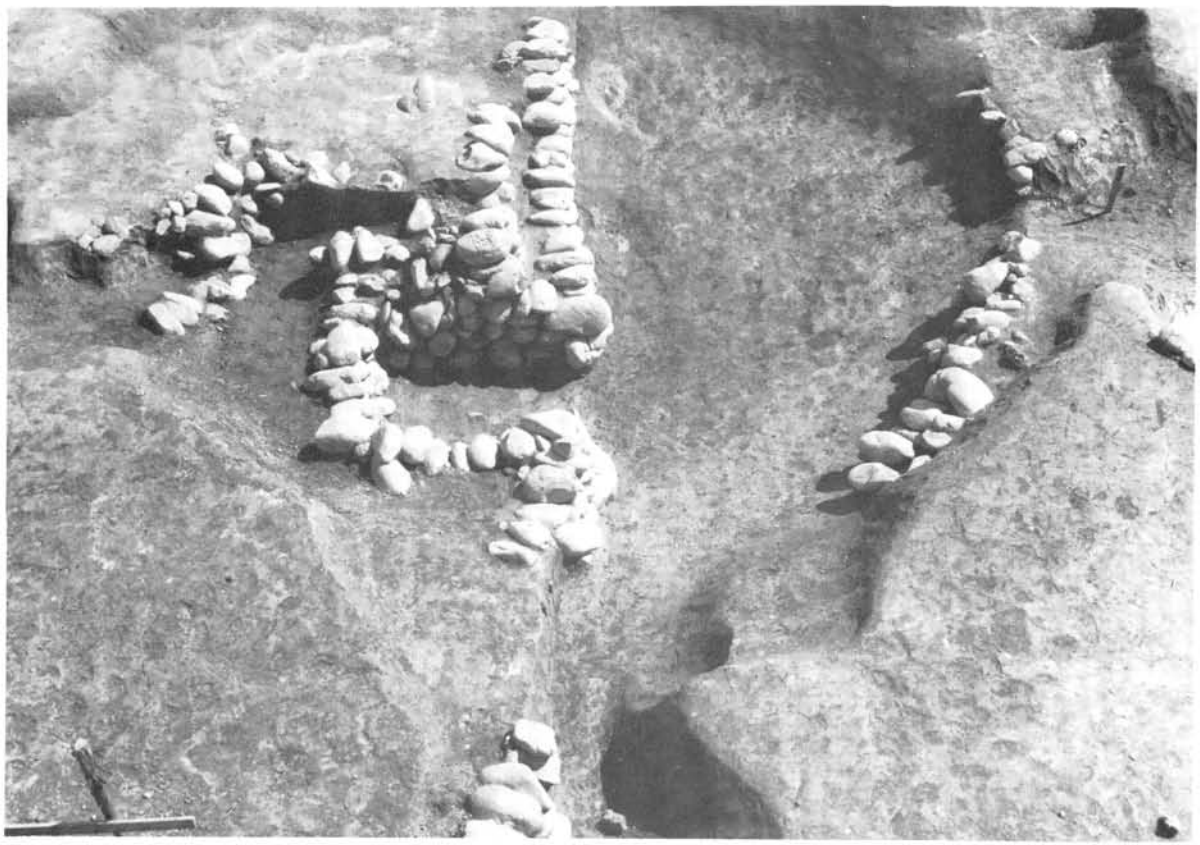
SK44, SP46埋石状況

SP41埋石状況

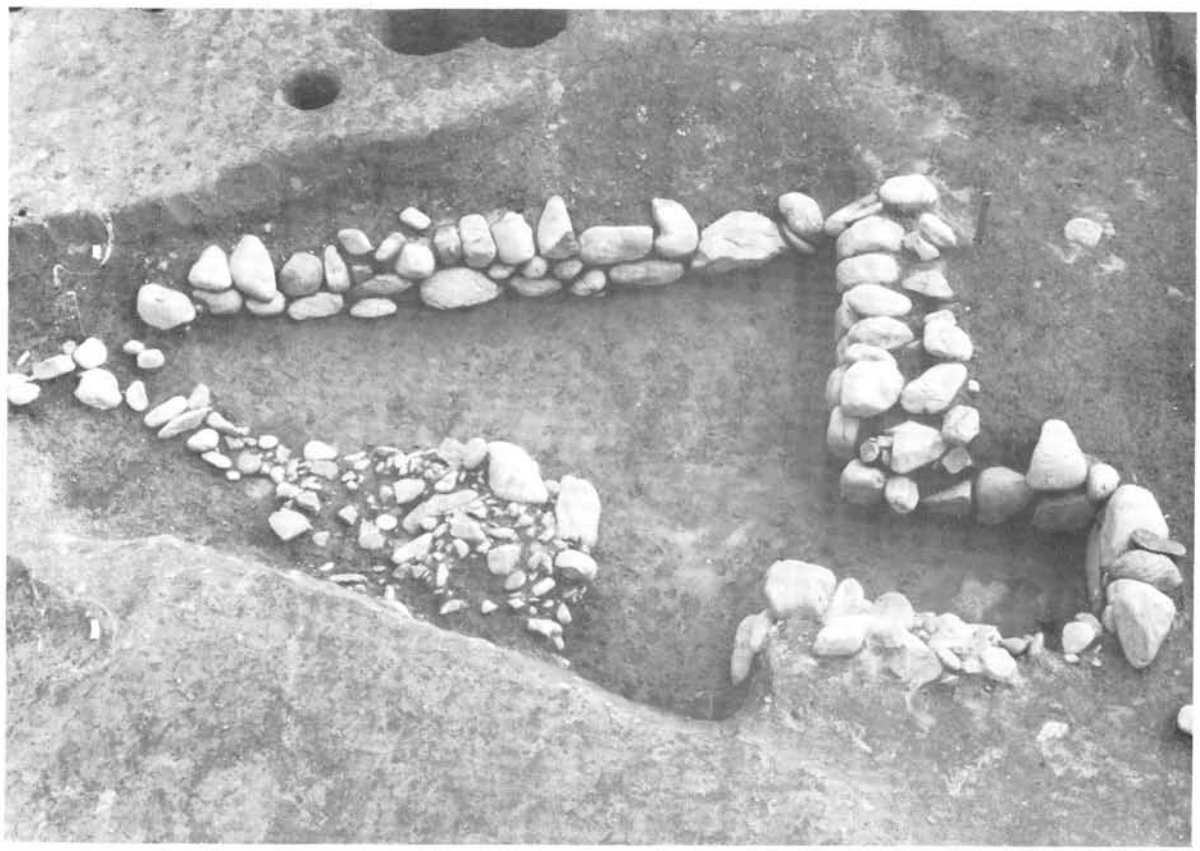


ＳＸ47，ＳＰ48埋石状況

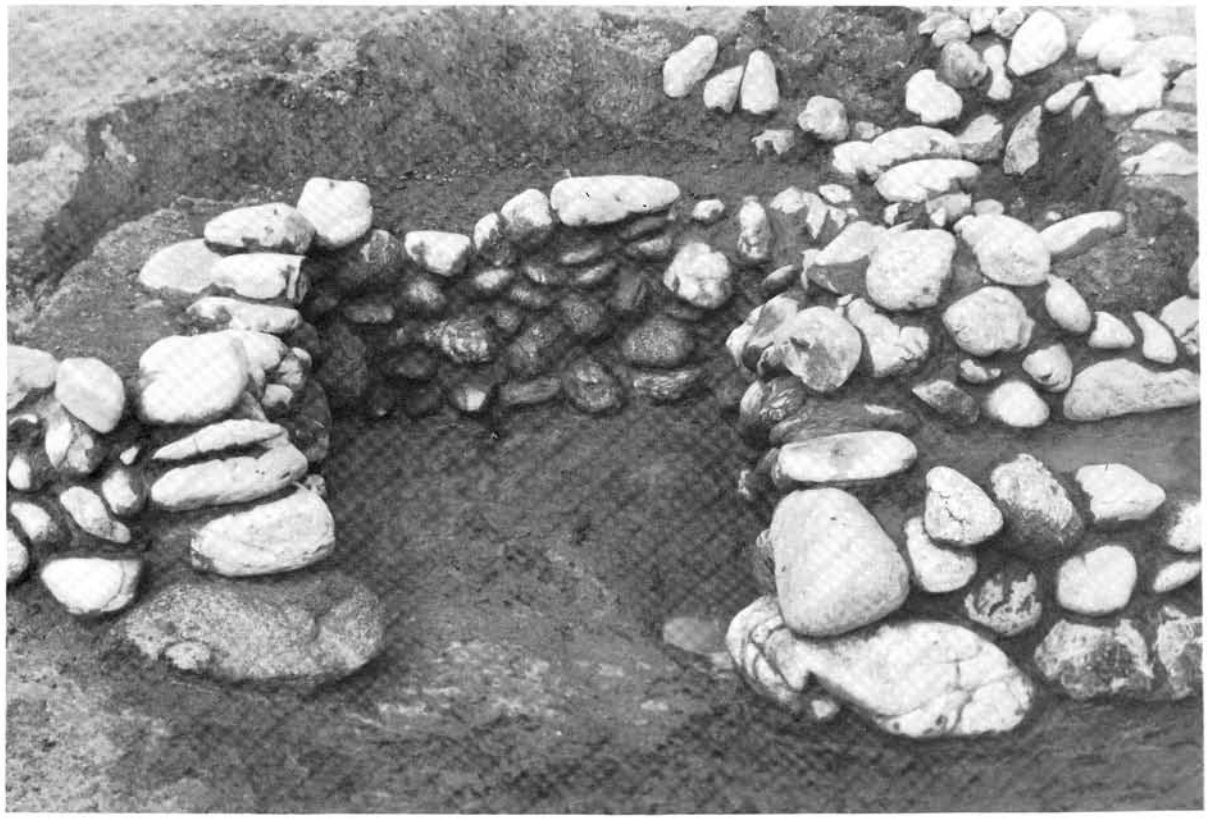
Ｃ地区中央部（南より）



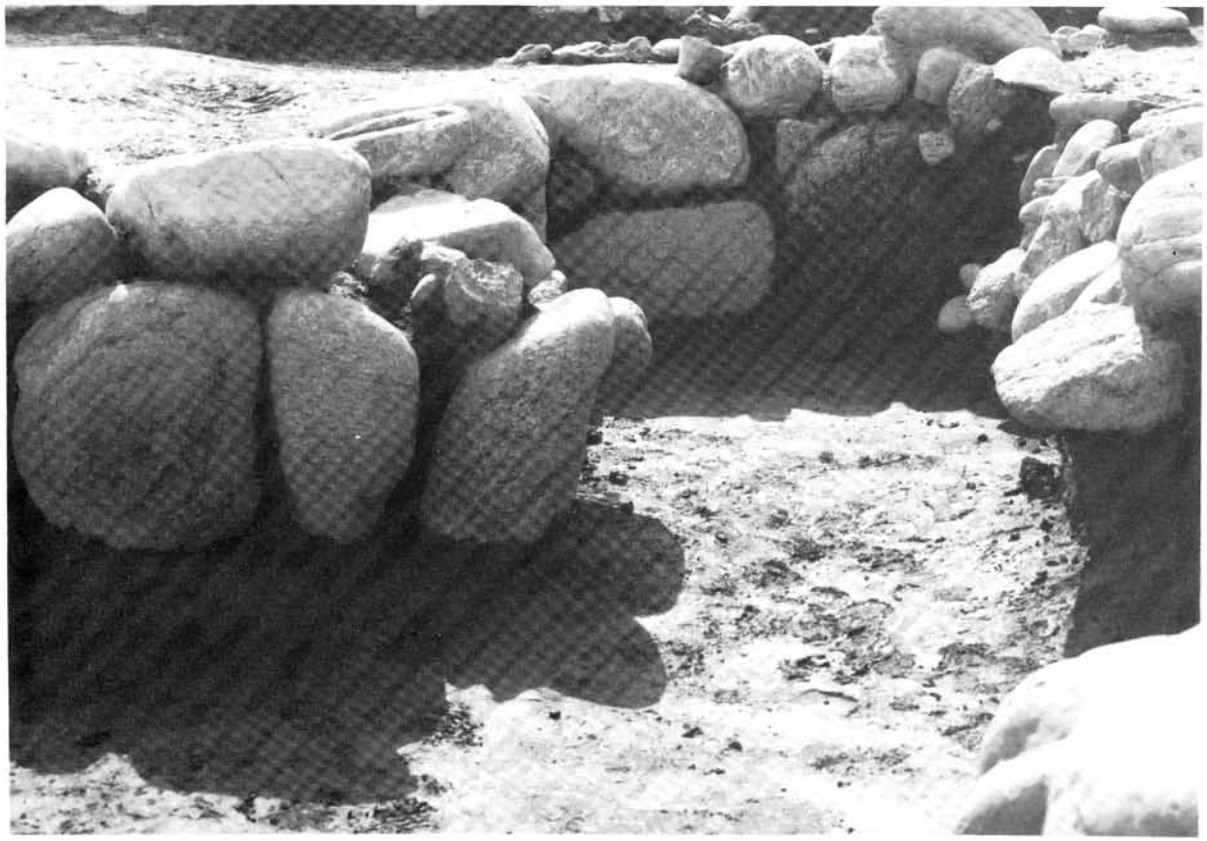
SP41（西より）



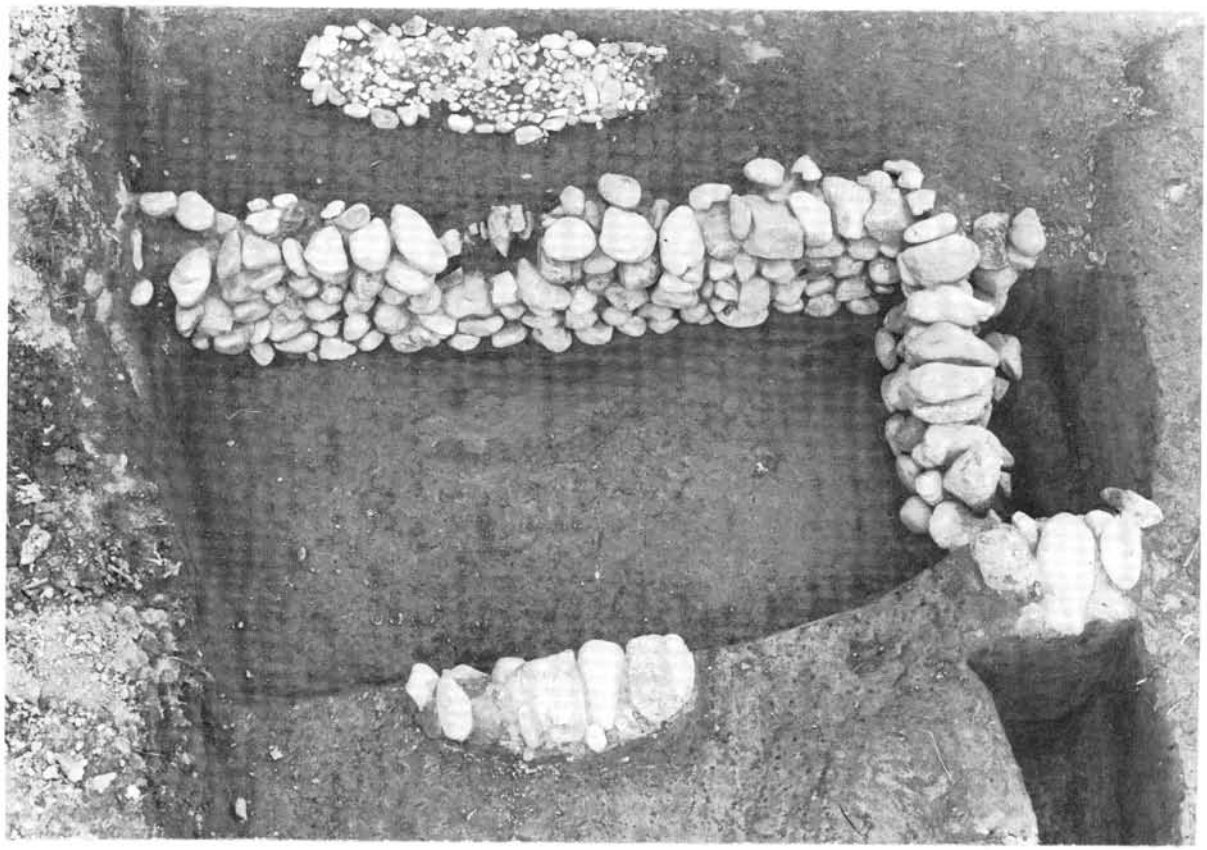
SP46（西より）



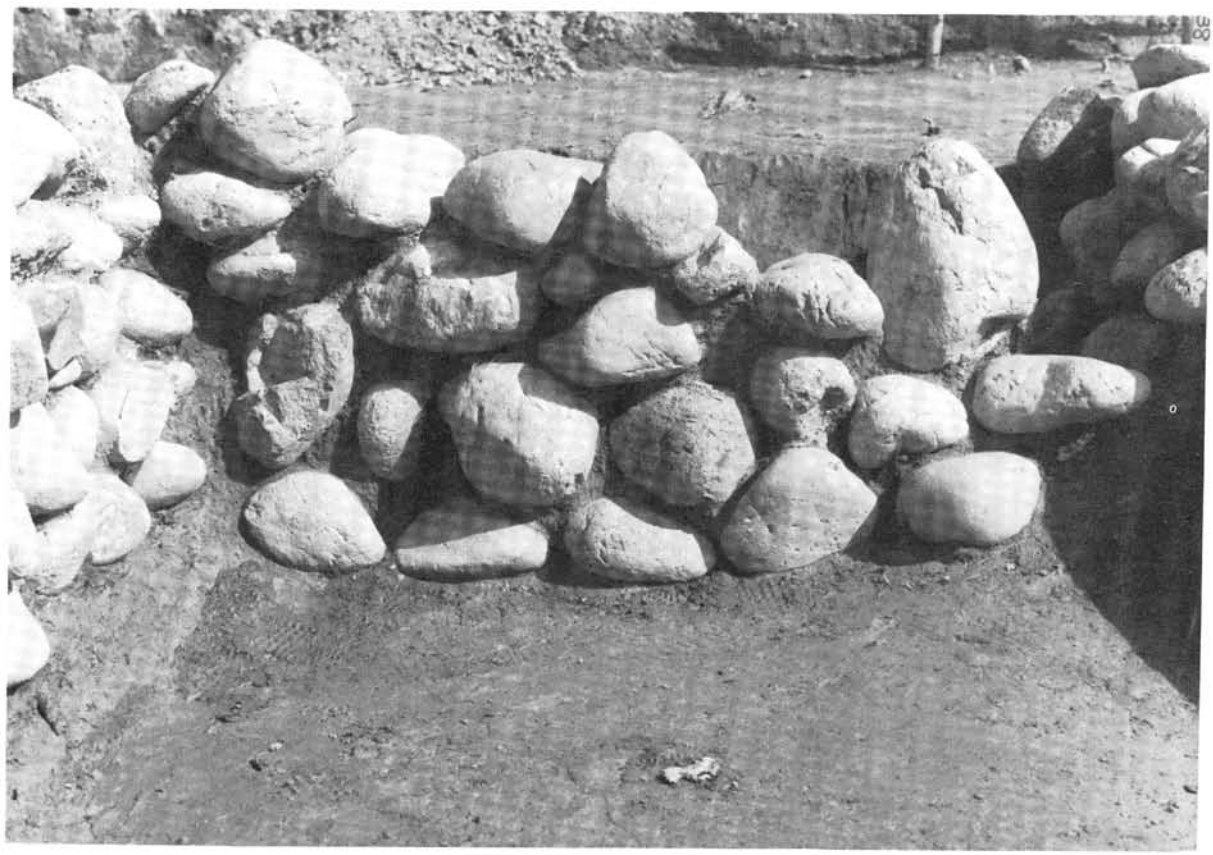
SP41張出部（南より）



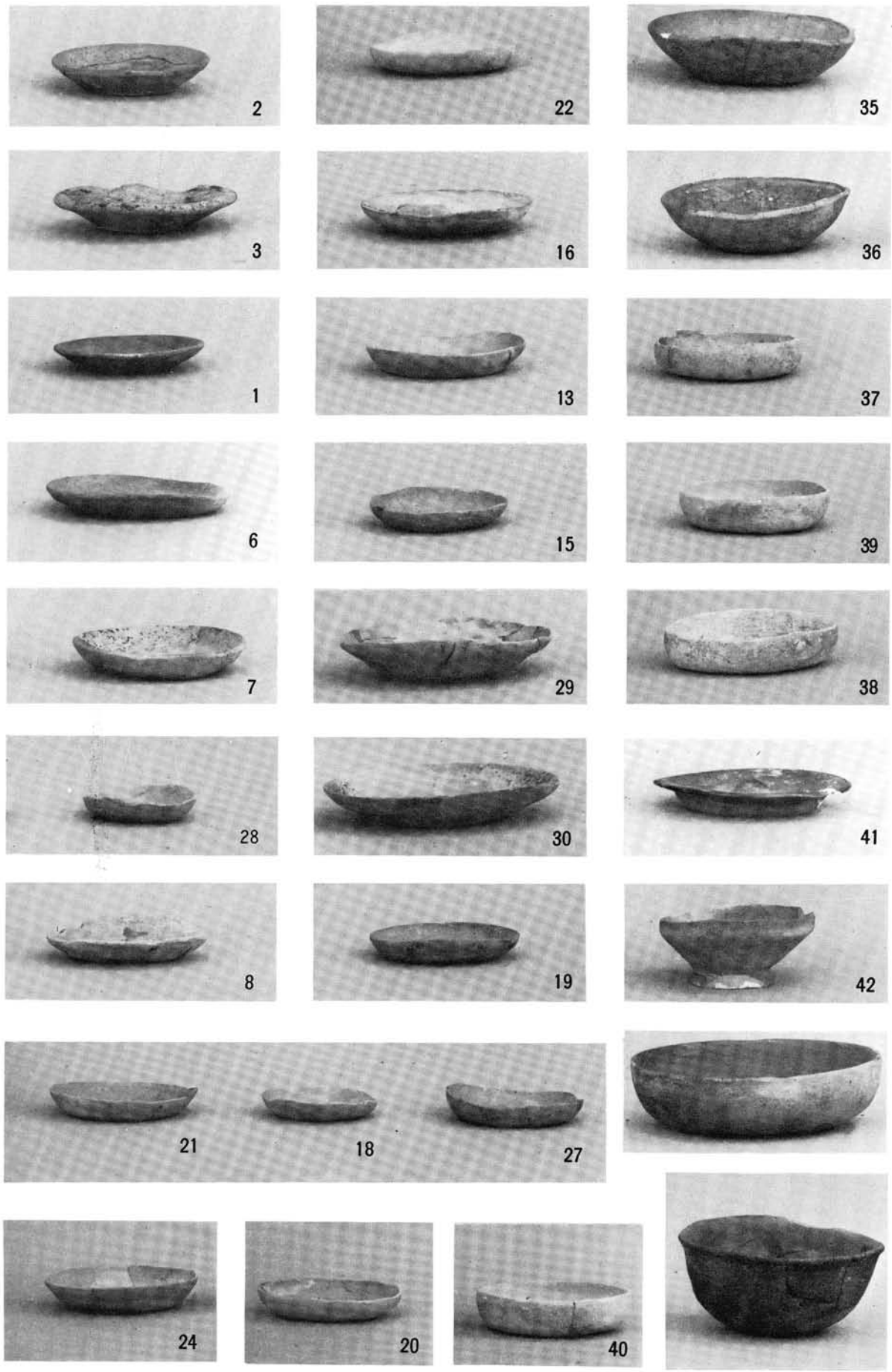
SP46　張出部（北より）



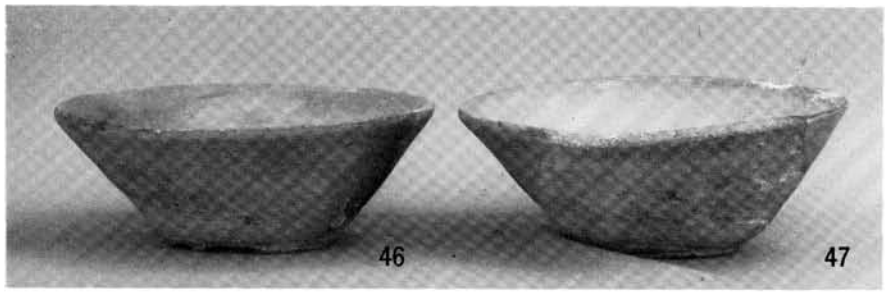
SX47, SP48

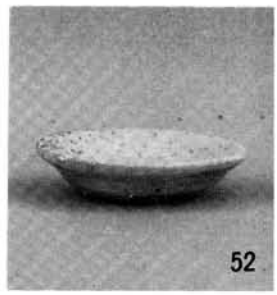


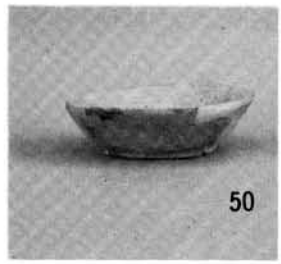
SP48東側石組み状況（西より）

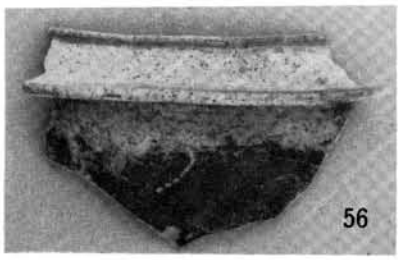


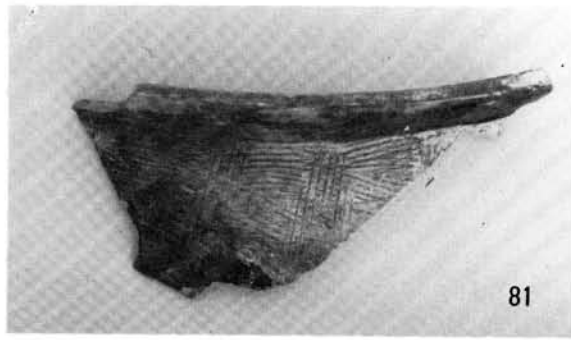
土　師　器（1：3）　右下無番号は古墳(下)・奈良時代(上)の土師器

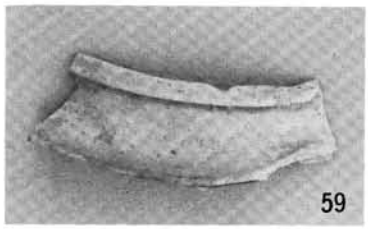


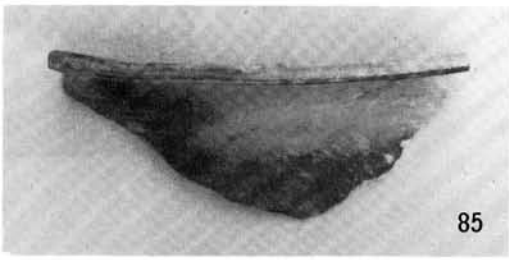




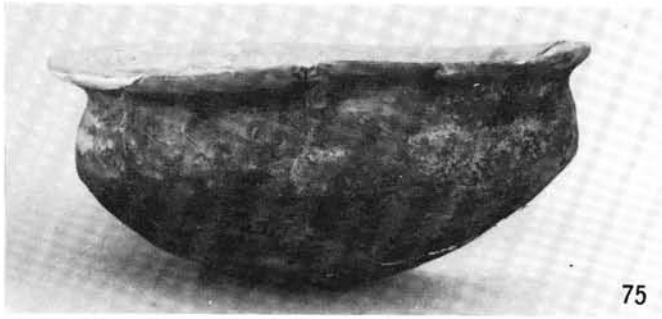


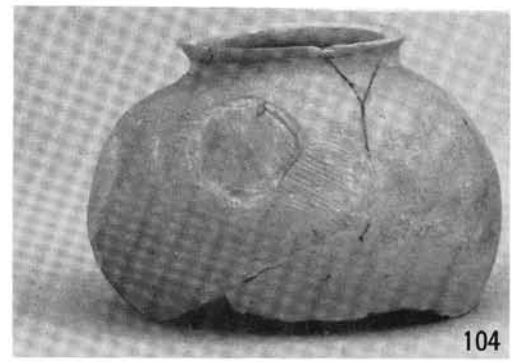


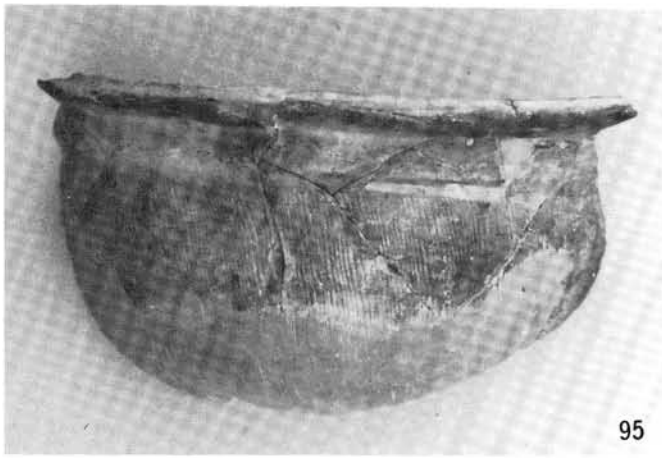


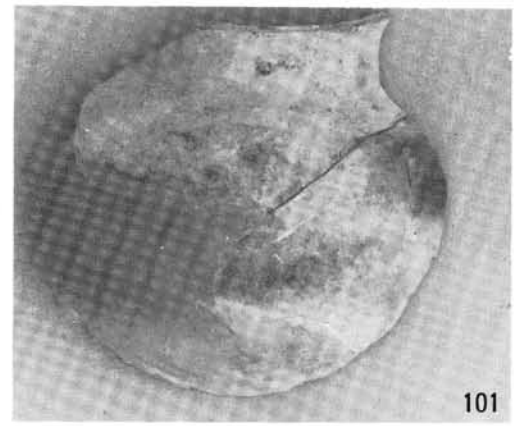


山茶椀・山皿・土師器（1：3）

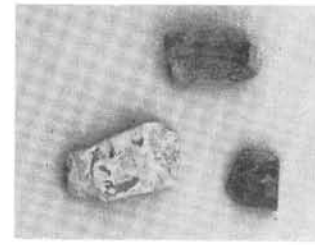

75


104

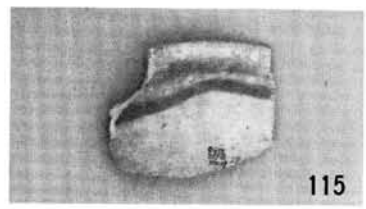

95

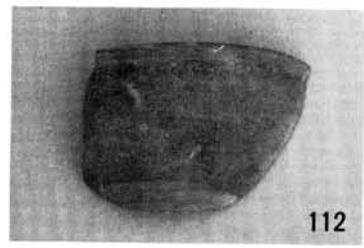

101

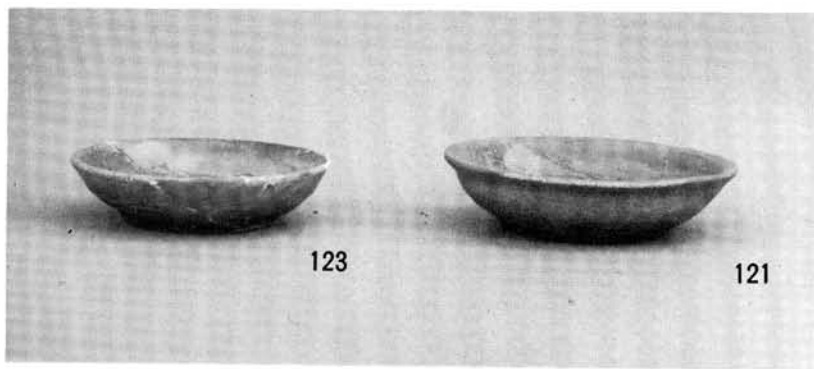
105

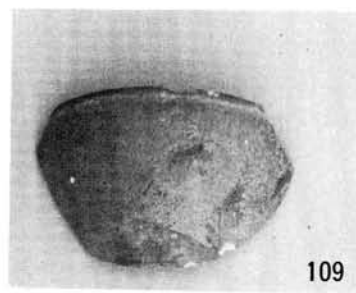

緑釉陶器片

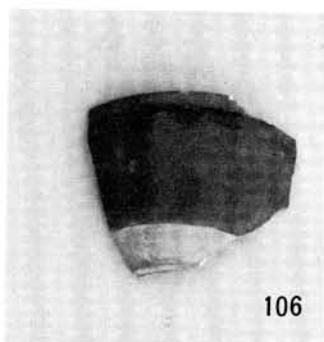
土 師 器（1：3）

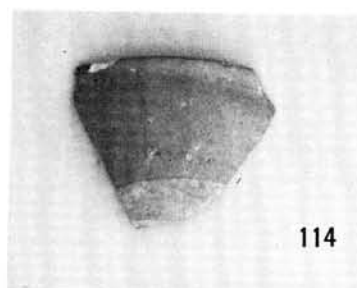


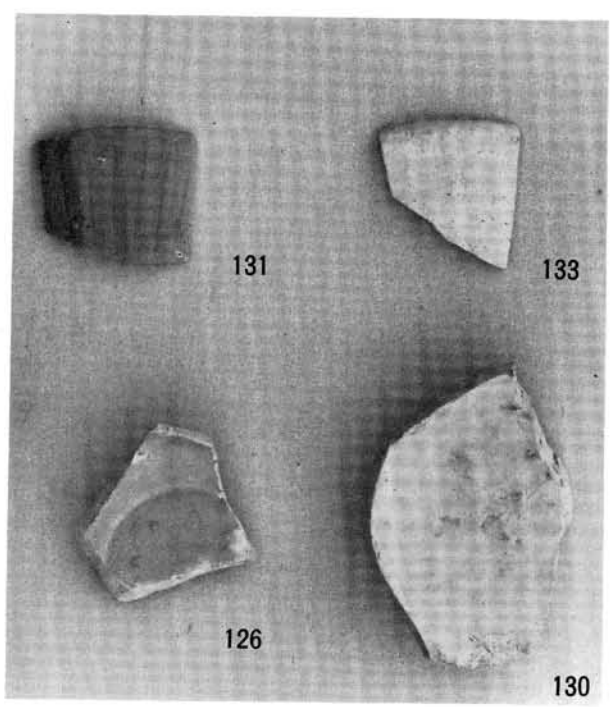






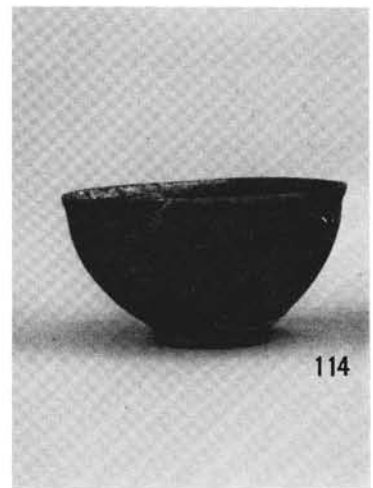


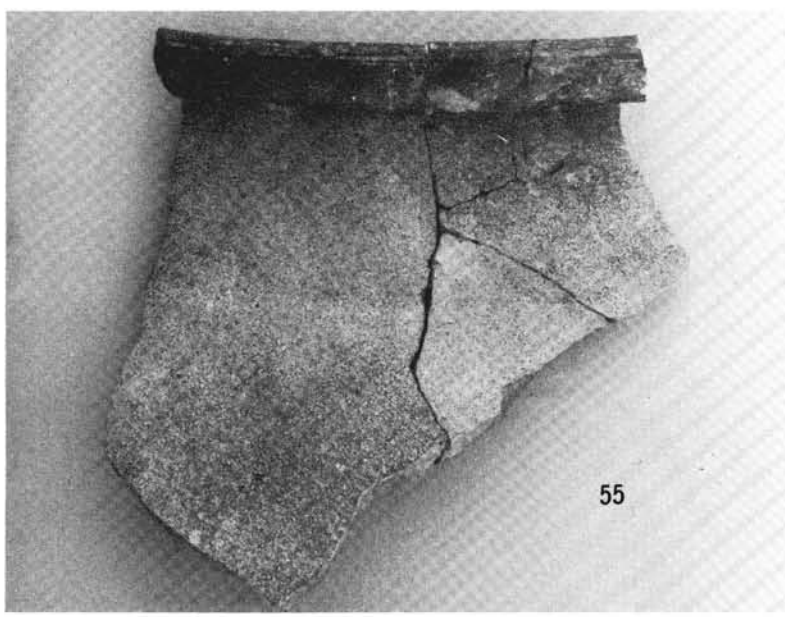


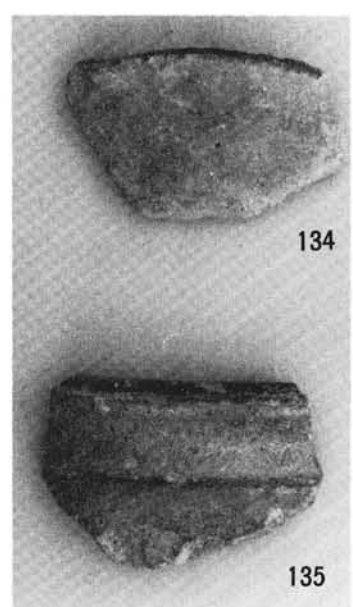


133	白　磁
127・131・130・126	青　磁
120	鉄釉小皿
123・121	灰釉小皿
115	平茶椀
112・109・114・106・110	天目茶椀

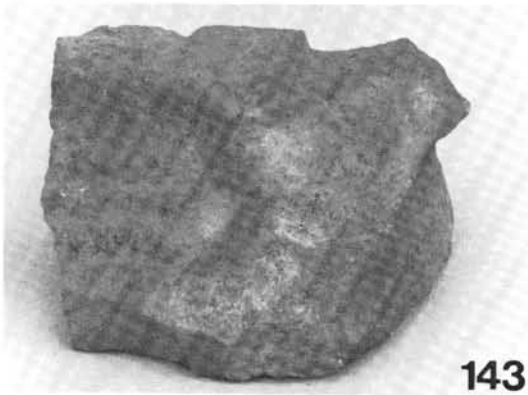
出土遺物（1：3）

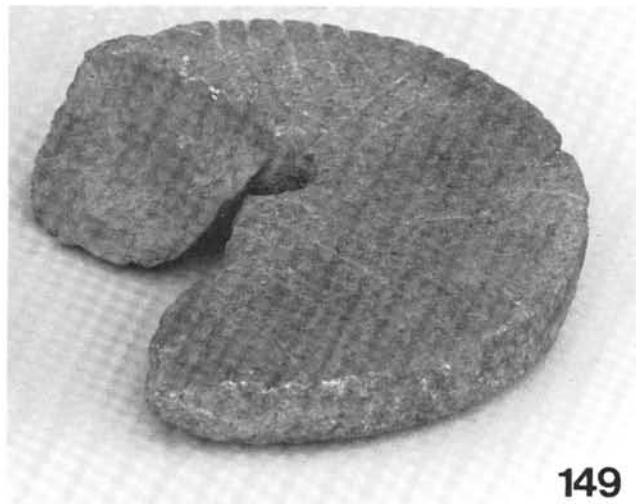


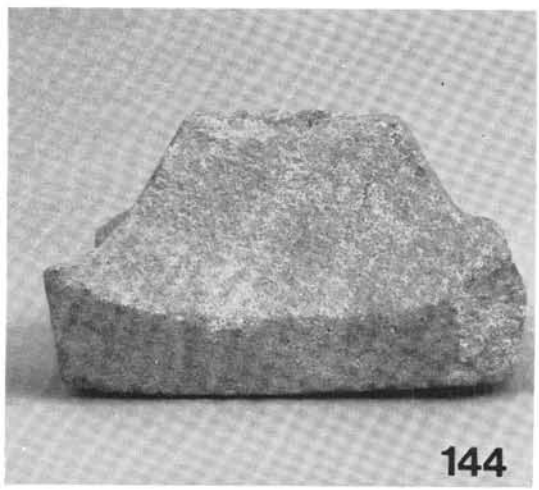


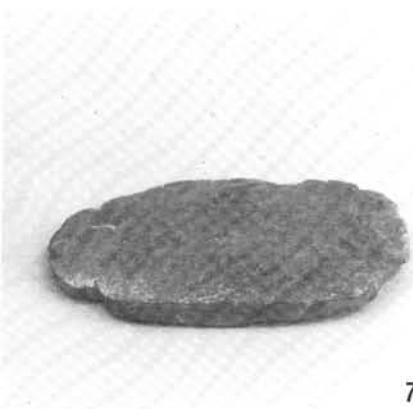


青磁・天目茶椀・常滑陶器（1：3）









石 製 品（1：3）

昭和54（1979）年12月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告34

山添遺跡発掘調査報告

1979年12月

編　集
発　行　　三重県教育委員会
印　刷　　オリエンタル印刷株式会社